

果が伴つた。これは子規の偉大なる性格と、眞成詩人的な精進振りにも據るが、歌の中に求めた技巧能力の烈しい發展でなくてはならぬ。自在なその手法が、いかなる歌にも子規の氣息を感じしめ、讀んで面白味と安心とがある。だがこの安心と面白味は、子規歿後、遠く時を隔てた今日にあつて思ひ當るもので、當時にあつてはその安心と面白味は、現在味はつて居るやうなものでなかつたのであらう。子規の生存當時に於て、その技巧手法は時流を超えた高きものを目差してゐたからである。この有觸れた結論こそ、當時の一般人心の動きへの反撥となつたのである。子規の歌の内容に就て考へれば、それは更に圖り知れざる無限の要求を子規自身有つてゐたのであらうと思ふ。

さて、直ちに定められない問題ではあるが少くとも子規の有つた藝術家的素質が、現今の歌壇人には稀薄となつてゐるのであつて、若しも歌壇が此儘の状態を續けて行つたならば、事件の報告に止まる作品の羅列に終るのみならず、自然を觀る眼が一事件の興味をのみ悦ぶ傾向となつてしまふ。「寫生せよ」といふ事が、「一事件をよく看よ」と云ふ程度に聞えて來てゐるのである。勿論、詞句のうまみなどを味ふ事は不可能であると言つてもよ

い。けれども、是が、表面のみの問題であつて、内面には、かうした傾向を打破しようとする苦しみがあると云ふのならば、進んで是に關する意見を歌壇に發表してよい筈である。一步進んで、現歌壇の歌といふものに對して言ふならば、技巧的の作品があるとしても、それは大むね技巧法といふものには重きを置かず、新聞の所謂三面記事式の事件的氣分を掴むことに多くの興味を覺えてゐるやうであり、又は、殊更難解の語句を交へた作品であつて、短歌としての技巧のうまみは毫も顧られてゐないといふ風である。子規の歌に面白味があるのは、傳統的な短歌の本質を無意識の裡に會得した爲である。唯、歌としての可否を論じられる餘地のあることは別問題である。以上の詮議立ても目新しい譯ではないが、さうした作品が次ぎ次ぎに現はれてゐる以上は、この問題の批評も次ぎ次ぎに提出されてゐてもよい譯であらう。

歌の調べさへ無視されてをらなければ、その作品は、あらゆる自由な相を以つて歌はれてゐても差闕へない譯であるが、抑々歌を作るといふことは、一人の心の顯れであるから、一事象を歌はんとする自分の立場が、はつきり作品の上感じられなくては歌の生命は無

い。これを、一事象として響く場合と、音調の上に響く場合と二様に考へることが出来よう。批評家は、かういふ所を鋭く洞察しなくてはならぬ。又、現代の如く、一雑誌の集團の上に在つて歌を毎月作りつつある人々にとつては、さういふ一集團の色合を自分のものとして、深く省察してみる必要がある。若し、この用意が無くて、漫然と一集團の上に歌を作りつつあるとしたならば、それは餘りに、現歌壇の方向に無關心であると稱さねばならぬ。少くとも、現歌壇の主流を成したところの基礎は、相互的であつたといふところにある。此點に十分の理解がなくてはならない。相互的であるその中心生命を掴むことだ。これは、自己の信念を寄せる謂に外ならぬ。

自分の歌が假令拙劣であつても、眞實の心で先進の作品に接するならば、歌についての批評の巧拙は別問題として、賛否の念は必ず生じなければならぬのである。それが感じ得られるならば既に批評であり、鑑賞である。かうして先進の歌を見てゆくうちに、技巧の問題は、自ら會得し得るものであると私は信ずる。この骨こが分れば、技法の變化は求めなくとも、内容的に修練されてくるものである。

「短歌の技巧」に就いて言ふには、短歌一首に就いての句法と、詞の吟味が肝要である。それをここで試みなかつたのは、差し當り問題が概論めいた論議と、かういふ常識論とを必要とするところからである。技巧論の體をなしてゐない書き方ではあるが、これらも短歌の技巧の一つである點を認識されれば足りるのである。不明の個所は指摘して戴けると幸である。それに據つてなるべく問題を補綴しつつ論旨を徹底せしめたい。

社會生活上の餘技として考へられて居りながら、餘技にあらざる、人と歌との深刻なる接近をそこに残された歌壇は、大きい作歌上の苦心と、社會上の苦索性が伴はなくてはその進展は難いであらう。子規、左千夫、赤彦等の精進及び態度には、歌は社會生活上の餘技であると謂ふ在來の觀念を斥け、歌のみの上に生き、發展し得る可能性を、充分に、且具體的に實行された觀があつた。一方或意味に於いて社會的發展を示してゐる現歌壇には、連句趣味的觀念の色合ひに互らうとする傾向がある。即ち初めに言へるが如く、歌に暗示を求めようとする風があることだ。集團の上に發達した藝術の内容には、恐らく短歌に限らず諸藝術の上に、かうした傾向の生ずるのは、否めない事實であらうが、この事實

の上に立脚し、或ひはそれを突破し、自己の作歌慾を推進めようとするには、いかなる用意の下に、その集團を觀取すべきか。つまり自身のものとしてその集團を見よといふ結論が立つのではあるまいか。ともかくも現代は短歌を趣味として扱ふごとき安閑とした態度ではをられぬ時だ。短歌は果して社會上に何を齎らしたか。現代の歌人は、日本の社會の上に、藝術の分野の下に、何を齎らしたか。全國に亘る無数の短歌雜誌と、その集團は、どのやうな生命となつて、この日本の社會に關聯しようとしてゐるのであるか。凡そ、作歌に意を注ぐ人々は、廣く、現代の歌壇の相を看るべきであり、その態度から自ら短歌の技巧に加ふる所があれば幸である。

島木赤彦、齋藤茂吉氏等の、刻苦して確立した「短歌寫生說」は、既に歌壇を風靡し、短歌は寫生でなくてはならぬと言ふ信念を植ゑ付けて、歌壇の一基調をなしてゐる。この「寫生せよ」といふ言葉は、この頃は餘りアララギでも見かけないやうであるが、數年前は相當多く使用された。この「寫生せよ」と言ふ言葉の内容は、率直に言へば、ものをよく凝視めて、それを眞實の心で表現せよと言ふことなのであるが、赤彦、茂吉氏等は「寫

生」といふ語義の淵源を探ぐらうとして、結局、支那に行はれた東洋畫論の中から概念を得、その説が落付いて今日に及んでゐる譯である。繪畫と短歌とに深い因縁がそこに生じた譯である。現代の歌道を洞察する人々は、よくこの關係に意を注ぐとよい。

人麿や、赤人などは、「寫生」といふが如き語を知らずに歌を作つて死んでいつたのであらう。「寫生」などと言はなくとも、この語義などの概念を知らなくとも、自分の觀たものをありのままに歌へばよい譯であらう。態々「寫生」の歌を作らなければならぬと思つて用意する爲に、自然觀照に理窟が加はるのであらう。ただ「寫生」の語義なり説明を知らうとする人々は、赤彦、茂吉氏等の寫生說に頼つて、それを熟讀玩味すればよいのであらう。熟讀玩味したからと言つて早速に歌が上手になるものではないが、歌を作る上には参考となるのである。「寫生」といふ語が、歌壇の上に高い意義を持ちはじめたのは、アララギが歌壇的に進出した時に始まつて今日に及んでゐるのであるが、言ふまでもなく「寫生」の概念も幾分づつ變化し、發達して來たものである。アララギの成長は、寫生說の成長であつた。かくてアララギの人々は、「寫生」の意義を天下に明らかに示し、他よ

り容喙せしめざる如く、堅固にして了つたのである。従つて、「寫生」といふ語は、いまでは權威ある語として、歌壇を濶歩し、太陽の如く輝やかざるを得なくなつてゐるのである。であるからある種の歌の批評言の中に、「この歌は寫生が足りない」と結論されると、作者は、いかにもと首肯し、口を噤ぐまざるを得なくなつてゐる。「寫生」といふ言葉に權威が生じてゐる譯である。それでは、果して批評さるる人は「寫生」の意義を會得してゐるかといふに、恐らく會得してゐる者は少いではあるまいか。是は一面、寫生の説に壓倒されてゐるからであつて、現歌壇の弱味をも證明さるる事なのである。壓倒されないやうな力強い歌人は出ないものであらうか。寫生の説の内容には、人の力量以外のものに近づかうとする大きい要求が構成されて了つてゐる故、その内容を理解する人にとつては、もてあます結論ではなからうか。理論に伴ふ實際運動の容易でない如く、識者は「寫生説」の内容が、今後如何に具體的のものとなつて實現さるるか、大きく、永く、眼を見張るべきであらう。

では、短歌の將來は、どういふ所へ落付くのであるか。今それを考へてみる。一集團が
あり、一雑誌があつて、その中で歌を作り合つてゐる現歌壇であるが、雑誌の發行といふものは、消滅する將來のある事は豫想されるであらう。だが其中で、人間一人の生き方は結果として、やはり歌へ入るべき一つの道の展ける可能性があるだらうか。又、一雑誌及び集團の解散と共に、一人の歌道をも衰へさして了ふであらうか。現在の歌の道に生きてゐる人々は、この邊を大きい問題として考慮してもよい。一雑誌、一集團にあつて、作歌する人々にとつては、作歌上の苦心以外の社會性を含んだ問題なのではあるまいか。それならば、一集團、一雑誌といふものを念頭に入れずに考へたとすれば、どういふ風になるのであるか。それは一個人としての歌人の出現を要求するものであつて、僧良寛のごとき平賀元義のごとき歌人が生ればよいのであらう。子規の言つた「眞成詩人」は、かういふ所にあるのではなからうか。然し、現代では、一集團の去就なり、動靜なりを豫想してよいのであるから、その集團を基礎とした、「眞成詩人」をも考へる事が出来るのではあるまいか。そこで、この「眞成詩人」といふものは一體何んであるかと云ふに（ここでは歌人として言及する）つまり、歌道の爲に自己の一生をそこに寄する人である。精神上に

も、物質上にも歌の爲に生き得た人である。良寛のごとく、托鉢して歌の道に参じた人を
含めて言ふのである。或ひは、病間生死の境に堪へて歌の道を確保した人である。或ひは、
歌道に参じて、歌界の方向を究め得たる人を指すのである。「眞成詩人」の解釋が果して
これで當れりや否や。歌の道は悠久であつて究め難く歌界が尙、混沌としてゐる今日、是
等の論旨が、「短歌の技巧」として通用するを得れば幸である。

(六、九)

正岡子規に學ぶ

今、正岡子規に學ぶ、と謂ふ題目を求めて短歌作者としての現在の感想を述べてみたい
と思ふのであるが、それには、該博なる知識と、犀利なる批評眼と、潔癖なる感情とを備
へなくてはならぬであらう。現在の自分はそれらに缺く所のある爲に十分子規に學び得な
いかも知れぬ。唯、歌よみとして生きる上に於いては、是非とも子規に覺めなくてはなら
ない許りでなく、子規を批判しようとする要求も生じてよいのであるから自分は爰で大膽
にものを言つてみようと思ふ。今、ここで子規の批判といふ言葉を使つたが、或ひは子規
の批判とはならず、現在の自分の抱懷してゐる歌よみとしての、小感情の呈露のみに止
まるかも知れぬ。このことを豫め前提に置いて書いて行きたい。

子規の偉大なる意志は、少年の頃より既にその面目を文章に示し、社會批評家としての

萌芽を、そこに十分提示してゐる。俳句は言ふまでも無く、和歌に於て、縱令萬葉集などの歌風の影響を受けざる以前においてすらその作品は輕薄感の伴はぬ、純粹な作者の心の表現であつた。参考としては俳句集「寒山落木より」和歌集「竹の里歌」を看るべきである。新しく短歌を學ぶ人々には、是非子規の初期の作品に立入つて研究没頭すべき義務がある。

子規は明治時代に在つて、徳川期の藝術史に對して、強き反省を拂つた人であつた。眞淵に依つて萬葉集の深い理解が拓かれようとして來た徳川時代の歌壇には、俳諧に於ける芭蕉の如き作品は示されなかつた。端的に言へば徳川時代の歌壇は、俳壇よりも普遍的でなかつた。ここに着目した子規は、最も深く俳諧の精神に己の姿を觀、芭蕉、蕪村の作品の上に、より高きものを觀望しようとした。従つて、子規の藝術家としての發展は、俳諧の上に立脚してゐると言はねばならぬ。つまり、すでに徳川時代に一般化された俳壇の上に、或る行き詰りを感じた子規は俳壇に於ける革新運動をなしたのである。これは言ふを俟たぬ事實である。

「俳諧大要」(明治二十八年)は俳人としての正岡子規の抱負のみならず、歌人としての抱負をも一面に於いて語つてゐる。

「今日普通の和歌と稱する者の文學的ならざればなり。萬葉集の歌は文學的に作爲せしものに非れども、稗氣ありて俗氣なき處却て文學的なる者多し。新古今集には間々佳篇あり。金槐和歌集には千古の絶唱十首許りある可し。徳川氏の末に到りては纖巧なる方のみ稍々文學的とはなれり。」云々。

如是説は、俳諧を論じてをり乍ら、當時に於ける子規の歌論と看做して遜色のないものである。然してこの當時の子規の俳句は、既に技方の點から言つて、悟道に參入してゐると看ていい。新しき傾向の上に子規の氣稟が現れてゐるのである。歌は俳句程練達してをらぬ。

「陣中日記」のうち三首

かへらじとかけてぞちかふ梓弓矢立たばさ

み首途すわれは

から山の風すさぶなり故さとの隅田の櫻今
か散るらん
見わたせばもろこしかけて舟もなし霞につ
づく春の海原

これらの歌にしても氣品あるものが窺はれ、すでに萬葉の精神に踏み入つてゐる子規の面目を彷彿せしむるに足ると思ふ。此歌は明治二十八年作で、子規二十九歳である。この年に子規は、すでに人として完成してゐて、勉強方面に於いては、基礎的の勉強の窮極を示してゐると言うても過言でない。子規の非凡なる所以である。又此年の子規年譜を閲すると

「明治二十八年

三月三日從軍記者として廣島に向ふ。郷里松山に歸省。四月十日第二軍に従ひ宇品出帆。金州に上陸、旅順に遊ぶ。

五月中旬大連港より歸る。舟中咯血、神戸病院に入る。

七月 須磨保養院に病を養ふ。

八月 松山へ歸省。

十月下旬松山出發、奈良を経て歸京、腰部疼痛起る。

『俳諧と武事』『羽林一枝』『陣中日記』『病痾雜記』『俳諧大要』『棒三昧』等を著す。子規派の俳風漸く認めらる。

以上の引例年譜は「現代日本文學全集正岡子規集」に據つた。最後の「子規派の俳風漸く認めらる」は恐らく事實であつたのである。「認めらる」と言ふことは、子規の俳句なり、俳論の完成の謂に他ならぬ。年譜の文章に據る迄もなく、自分はかう斷定したい。此年「五月中旬大連灣より歸る。舟中咯血」とある。子規の病牀生活への第一歩が、偶子規の藝術の高きに向はんとする時に始つてゐるといふ事は痛恨の至りと言はねばならぬ。

明治三十年は全く病牀の人となつてゐる。歌は、愚庵和尚から送られた柿の禮を歌つたのが六首。俳句は相當に作つてゐる。俳句には堪らなく自分の神經を咬むものがある。子規は俳諧の形式の上に、内容の上に、實に偉大なるものを齎してゐると思ふ。子規が高濱

虚子氏に宛てた書簡に左の如き一節がある。

「余の如く大望を抱きて空しく土と化せしもの古來幾人かある余はほとんど之を知らずされば余今ここに死したりとも誰か余に大望ありしと許りも知り得んや去りとて未だ遂げざる大望の計畫を人に向つて話さば人は呆然として其大なるに驚くにあらざれば輒然として其狂に近きを笑はん鵠鴻の志は燕雀の知る所にあらず大鵬南を圖つて徒らに鷓鴣に笑はれんのみ余は終に未遂の大望を他に漏らす能はざるなり古人亦斯の如く思ひあきらめしかば其大望は後世終に之を知るなきに至りしのみといふ瞬間の考のみ僅かに今記憶せり(明治二十九年)

或人子規を評して、子規がもし健康で長生したなら、政治家にならんとしたかも知れぬと言つたが、政治家云々は當らずとしても、恐らく彼に經綸の抱負はあつたかも知れぬ。眞實なる寫生の伴ふ表現は、形式の如何に拘らず、内容には偉大なものを感得せしむるものである。子規は、明治二十六年「文界八つあたり」の「和歌」と題する文中に

「今日和歌といふものの價値を回復せんとならば所謂歌人(即ち愚癡なる國學者と野心あ

る名利家)の手を離して之を眞成詩人の手に渡すの一策あるのみ。」云々と言つてをる。「眞成詩人」と言つた子規自身、眞成の詩人として天命を盡してゐるのである。

子規の大望は、將して「眞成詩人」であつたらうか。

明治三十一年は「和歌革新に着手す」とあつて有名なる「歌よみに與ふる書」を發表してをる。此文章はこれまで多く引用され餘りに有名であり、歌道に對する烽火であつて、短歌の本道を識らうとする人々は「歌よみに與ふる書」を讀むべきである。現代の歌風はかう言ふ理論から發達してゐるのである。以下自分の感想を述べる方便として左に一節を引用して置かうと思ふ。

「今迄隱居したる歌社會に老人崇拜の田舎者多きも怪むに足らねども此老人崇拜の弊を改めねば歌は進歩不可致候。歌は平等無差別なり、歌の上に老少も貴賤も無之候。歌よまんとする少年あらば老人杯にかまはずに勝手に歌を詠むが善かるべしと御言可被下候。

(明治三十一年「十たび歌よみに與ふる書」)

子規は、當時の歌壇に、かういふ鋭い論法で肉迫してゐるのである。「歌は平等無差別なり」「歌の上に老少も貴賤も無之候」と言つてをるではないか。歌壇の現状は、既にその實行期に入つてゐる。中央歌壇及び地方歌壇に群立する歌の雑誌に集まる者は、凡そあらゆる階級の人々に及んでゐる状態である。斯の如きは子規の歌論の社會化といふことと、その事實の普遍とを實に克く語つてゐるのであるが、此實狀に到達するまでの経路を考へるものは、根岸短歌會の功績とそれに伴ふアラギ同人の功績とを否むことは出来ない。子規を直ちに理解したのは伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦であつた。この人々の歌論なり、作風なりは、子規の歌論より發足した現歌壇への最初の具體的運動であり、實現であつた。左千夫、節、赤彦はすでに何れも故人であるが、深く子規の精神を體得して、大きい足跡を残してゐる。以上の自分の概括的な、ありふれた一瞥も、子規の歌論が歌界及び歌よみに如何に影響をなしたかといふ點を識る上には、相當重視すべき問題を藏してゐるのではあるまいかと思ふ。

さて問題は後へ戻つて、明治三十一年の歌壇に送つた戰闘的論難「歌よみに與ふる書」

は單なる論難に止まらず實行の伴うたものであつて、その結果は直ちに「百中十首」となつて公表されてゐる。齋藤茂吉氏は、大正十年發行「正岡子規選集」の「解説」の中で左の如く謂はれてゐる。

「百中十首」といふ百二十首の歌が即ちそれである。それを見ると、俳句の方で悟入した、あらゆる看方あらゆる技方を試みて居られる。革新運動の要約でなければならぬ。「破型」とか「變化」とか「新」とかいふものが盡く出てゐるといつてよい。この「變化」「新」に留意されたことは先生の一生を通じてである。」云々

此言は、歌を學ぶ者、子規の歌風を知らんとする者を益する事が甚大であつた。つまり子規は歌の在來の古き着想に深い不満があつた、そこから句法乃至、感受の上の「新」に目を付けたのであつた。一面、鬱勃とした旺盛な作歌力は、おのづから豊富なる句法の變化を生じ、意識的の工夫がなくとも、在來の知識が、そこに新詩想となつて表出されたものであつた。現在に至るまで子規のその頃の歌が自分達の耳朵に響きを傳ふるのは、詞句のみの工夫に非ずして、日本歌壇精神を背景とした、子規の人としての力強い叫びがあつ

たからであり、同時に國語に對する洗練された理解があつたからである。工夫と變化のみを追ふものの製作が永い生命を保つ譯がないのである。これらは「新」にも非ず、「變化」にも非ず、人間性の有つ薄弱なる一面を語る淺薄な藝術的亢奮に止まるものと言ふ外はない。藝術史上に於ける一の遊戯に過ぎない。「竹の里歌」中の佳作を知るには、齋藤茂吉氏の「正岡子規選集」に及ぶものは無いが、作歌上の經路を知るには、「竹の里歌」全體を味到して看るがよい。「竹の里歌」からは、おのづから又新しき子規の作風を感じ得るであらう。そこで系統的の歌の批判なり、一首若くは、一聯に就いての批評がそこに必要となつたのであるが、これは別に書く事にする。現在自分は、「正岡子規に學ぶ」といふ題目を求めて何か言ふべき筈であつた。

子規の日本藝術史上に於ける功績は、自分などが今更縷説するまでも無いが、文章家、俳人、歌人としての子規の業績は常に腦裡を離れないので、今ここでは、歌人としての子規が、今日のやうな結果を現歌壇に遺したかを検討してみたいのである。根岸短歌會に集まつた人々は、病牀の子規を圍んで歌を語り、俳諧を語り、且つ教を乞うてその製作に

没頭した。子規は生死を律し得ざる病臥にあつて、尙文章を作り、俳句を作り、實生活と戦ひ、藝術家としての責務を果さうとした。子規のこの生活を深く凝視した伊藤左千夫は歌の道には一朝にして測り難き要求のある事を感じたのである。實生活から歌を切離すことの不可能を感じしめるものは、子規の晩年の歌である。(俳句はいまここに言はず)この點に就て、子規は立論によつて明瞭にしてはをらぬが、全體の歌論を通觀する時、又生涯を識る事によつて、是を首肯することは出來ると思ふ。

牛乳搾取業といふ職業を持つた歌人伊藤左千夫は歌よみとしての實際を子規の上に認めたのは、子規の生活とは關りなきやうであつて、相似た思想を繼承するところがあつた。以上の自分の説は、甚だ簡單で、幼稚であることを免れぬが、兎も角アラギの歌風の淵源はかういふ處にある。若し伊藤左千夫が子規を直ちに理解するところが無かつたならば根岸短歌會の功績は埋もれたもので終つたのである。左千夫は、子規といふ人を理解したのである。「人」を理解したのである。特に自分はこれを強調しておきたい。左千夫は

「予は子規を引合に出して話をすると、いやにうるさがる所の新知識諸君、否さういふ

人があるならば其の手前の成行を拜見致度く思つとる。さて今日もであるが、これからでもある。「馬酔木」の命のある限り左千夫の命のある限りは、子規子の話は絶えない。いや絶やさないと、迷惑に思ふ諸君は遠のいて居れ」

と言つてゐる。子規歿後の伊藤左千夫は子規を語つて倦むを知らなかつた。「左千夫歌論集」中の正岡子規に關する論文は、子規の人格論であり、左千夫の人生觀であり、短歌本來の流れを明らかに示した歌論でもある。左千夫の「正岡子規論」の骨子は、「眞詩人」としての子規を絶對的に認めんとするのであつて、作品に對する具體論ではない。子規と左千夫の人格的交流であつた。そしてその絶對的な態度論であつた。左千夫は子規の歌の批評に就ては多くを語つてはをらぬ。子規の歌の批評に深い理解を以つて筆を執つたのは、赤彦であり、茂吉である。此批評は、子規の寫生説に重きを置いて、深い所から論旨を築き上げて行つた。アララギの寫生説はこの二氏によつて論旨を堅められた。かの子規の人格論と、寫生論がアララギの今日を成さしめた基礎であるといふ所以である。

眞實なる寫生の極致は、人性を語るものであり、崇高なる人格の發露は、自然性を語る

ものである。右の理論を體驗し、歌作の上に實行したのは島木赤彦である。以上の理論を具體的に立證したい人々は、島木赤彦及齋藤茂吉氏の歌論に據ればよい。それを又實際に看たいならば作物に據ればよい。

楮、それならば、子規の和歌革新運動が、歌の世界ではいかなる形式となつて今日に及んでゐるか。前に一寸言つた通り、歌の雜誌の群立であり、その集團である。いま歌よみは天下に瀰漫し、子規の所謂老少も貴賤も無之有様であるが、歌壇のこの集團はいま社會的に論ぜらるべき時期に逢着してゐるのではないか。又短歌製作態度の上にも微妙なる變化を生じつつあるのではないか。此邊の消息を感得してゐる人も餘程多くなつて來た事と思ふ。

子規の歌風は衰へたといふ。これは現代に當然起りさうな問題であるが、いまだ論じ盡くされてはをらぬ。子規の寫生説の發展が現代歌壇へどのやうに一般化されつつあるか。又社會へ、いかなる相を以つて影響しつつあるか。寫生なるものの實際現象がどの方面に轉用活躍されてゐるか。子規の寫生説、引いてはアララギの寫生説の中に活潑に働いたそ

の學術的用語例乃至は、實踐的用例が、實際問題として人々の上に如何に具體化されて來てをるか。

自分は少くも現歌壇に據つて、かういふ風に觀じてゐる一人であるが、さてそれならば具體化されたその事實は何であるかと謂ふことになつてくる。これは今後歌論の上に、歌論以外の文章の上にぼつぼつ論述してみたいと自分は思つてゐる。

自分の文章なり歌論なりが、いまだ不透明である事は萬々承知してゐるが、これを不満とする人は其點指摘してくれるといい。人に逢はずそれを言つて氣を腐らすのは弱いのであるが、自分はこんな事を言つて見たかつた。

(昭和六年三月)

雜 感

最近、「新興短歌檢討」と謂ふ題を與へられて僕は一文を草した。その文章中、「プロレタリア的短歌」とか、「新興短歌」とか、「プロレタリア藝術運動」とか謂ふ語を使用した。が、どうも、「新興短歌檢討」等と謂ふ題を與へられると勢ひそんな語を使はなくてはならなくなるらしい。かういふ語の内容については各自研究すればよいのであるが、かうした「プロレタリア藝術運動」に對してかつては、齋藤茂吉氏が、昭和三年にアララギとしての意見を表明されてゐるから、さういふものを研究すれば現代歌壇に於ける「プロレタリア的短歌」の骨子が判るのであらう。今のところ、さうした「プロレタリア的短歌」なる歌を作る仲間からは、立派な製作品が發表されてゐない。藝術運動會のやうな事ばかりやつてゐて、實際の人の力が顯れて來ないのであるからどうにもならない。

ともかく、現在は、アララギの歌風といふものが日本歌壇に瀰漫してゐる。この現在のアララギの歌風といふものは、幾人かの個性のつきつめられた藝術運動の結果であつて、此間幾人かの個性は、飾にかけられて發達して來たものであるゆゑ、一朝一夕では崩潰しない歌風である。ただ人間には、生理的發達の上に精力の減退といふ時期がある。この際に當つて、大きく、根強く擴がつてゐるアララギの歌風の上には、無限の要求が生じてゐる譯である。これに耐へ得る人があるや否やは、可成り大きい問題なのである。倦怠と、なげやり、これは心理的過程において一度は當然起りくる状態であつて、アララギ歌風の上にもその影を寫すのである。されば、アララギの歌風を深く研究しようと思ふ人は、一年間に亘るアララギ誌上の作品を検討してみれば判る。そこには、アララギの歌風に對する煩悶がいちじるしく表明されてゐるであらう。これは、理論では判らぬ、藝術製作者のみの與り識るところである。

又一方、古代の、萬葉集の歌風を深く研究する人々は、その萬葉の歌風を標準として、現在のアララギの歌風に大きい要求を生じてゐる事であらう。要求の一條件としては、萬

葉集の相をもつと判然歌壇に示したき願望の下に、學者的態度を以つて作歌する事である。作歌せずに純粹に學者的立場にあつて要求する人々もある。しかし、是等の人々の間にあつて、古代の萬葉集の相を、歴史的に觀る人と作歌的に觀る傾向とがある譯である。どちらでもよい譯であるが、そこに人間の仕事として判然したものが顯ればよい。學究的の立場にあつては「仙覺律師」の如き仕事がある。それには先づ、萬葉集の歌風への信賴と、現歌壇が、どのやうな態度を以つて萬葉集の相を觀てゐるかを極め得る力と、萬葉集の眞實の相がどんな感じの下に發達してゐるか、そこを觀る人間としての、現代に於ける眞實性を僕は要求する。

「萬葉集の仕事」これは、日本の誰人が爲し得るか、どのやうな環境に在る誰人が爲し得るか。僕の如き淺學の徒は、これを云々する資格が無いのかも知れぬ。

足下のこのごろの御心持はこんな風なのではないかと、歌を示され持ち廻られ、例へば、自分の作を示す場合と、他人の作を持つてくる場合と、古來から傳はる歌を持つてくる場

合が無いとも限らぬ。萬葉集卷十一、十二の歌は、是等の幾つかの場合を豫想して考へ得られる作者が多いかも知れぬ。作者不明はその因縁を語つてゐる。この感想は、甚だ貧弱であるが、歌といふものを批判するには、女のやうな氣持にもならなければ判らぬ場合がある。

『寫生の歌がどういふ風に新しく進んで來て居るか』といふ質問を受けたが、この理論には答へられない事を僕は述べた。これは、「寫生の歌」といふ語は、「アララギの歌」といふ風に世間に考へられてゐるのかも知れない。「アララギの歌」はどういふ風に進んで來てゐるかといふのならば理論は立つのである。「アララギの歌」といへば「寫生の歌」と思はれる程、アララギに於ける「寫生」なる語は歌壇の上に滲透してゐるのである。それだけ僕達はある歌の價値を云々する時、此歌は寫生であるとか、寫生では無いとか簡単に批評し去る事が出来る場合がある。然しこの語は、アララギの歌風を信ずる者にとつては自然に響くが、アララギの歌風に重きを置かない者にとつては、寧ろ反感に近い心を抱か

されるであらう。藝術製作上、「寫生的」と謂ふことは重要な條件でありながら、さういひたくない人達が多いであらう。であるからかういふ結論で満足しなくてはならぬのであらう。「寫生」といふ語を使ひたくない者は使はなくともよい。ともかく自然をみつめてゐる作者の力強い姿が、作品の上に現れてをればよい。「アララギの歌」を研究する人の爲に、「アララギの歌風」を目指して戦はんとする人の爲に、僕のこんな感想が役立つ時が來ないとも限らぬ。

新しい現代の思想を語つてゐる書物を讀まない人でも、現代に於いて、現代生活に直面して、物質的にしろ、精神的にしろ、生活に苦んでゐる人々は、日常、人間同志の語つてゐる會話に敏感なる悟性を働かしてゐる事は事實である。苦勞した人は、例へ目の前で自分の知らぬ外國語で、暗示的に嘲弄されても判るのであつて、人間の生活は自分の息吐いた時に自然的の反響をいづこかに感ずる如く氣息が正しいのである。人間はこの氣息の正しさを求めてやまないのであるが、物質的生活に追はれつつある人々にとつては、こんな

瞑想じみた觀念論に囚はれて居られないのである。ただ事實としては、こんなことを思ふ苦しさであり、莫迦らしさである。さて、それならば奈何うしたらよいのであるかと言ふに、現在の僕は歌を作るより能はないのである。

汚いと言つて、汚なく無い事を思はせる言ひ方は、人間の本性であつて、悪い傾向として取扱へないのであるが、ただ此中に、汚いと言つて、汚く言はざるを得ない人間的の強さ、これが藝術家の本領であつて、歌でいへば調子の高さである。根柢が萬人に通じなくてはならぬものである。「強さ」が社會への批評であり、人間への批評である。この僕の持論は、健康的であり、不變的である。一面、常識的である。だが、常識的が常識的に強く響き合ふところに、東洋本來の藝術上の妙味が發展するのであつて、僕は、かういふ人間同志のつきあひを、いかなる場合にあつても生かし得る人を求めて止まない。

(昭和五年十一月)

中村先生の思出

中村先生と初めてお逢ひしたのは、大正六年五月二十二日、齋藤茂吉氏宅、青山脳病院の娛樂室で開かれたアララギ歌會席上である。アララギ第十卷第六號に歌會の記事が掲げられてゐる。短文ゆゑ左に引用しておかう。「中村憲吉久し振にて上京す。五月二十二日茂吉宅に在京アララギ會員の歌會を催す。會するもの三十人、課題「樹木」の互評午後五時より十一時半に互れり。アララギ未曾有の盛會なり。」會費が十錢で、夕飯に握飯が出た。白面の少年であつた私が、橋田東聲氏に食つてかかつたり、當時國學院在學中の、廣野君が制服姿でものを言つてゐるのが癢に障つたりして、議論風發、一首の批評が永く時間がかかるので容易に進行しなかつた爲に、土屋文明氏は時計を持ち出して一首の歌の批評時間を制限するやうになつた。私は、土屋氏が時計を持ち出したのも癢に障つてならな

かつた。齋藤茂吉氏は、坐布團の上に座禪を組むやうに坐つて、時々眼をつぶつては諸氏の議論を傾聴してゐる。中村先生は腹痛がすると云はれて、席上に身を横たへてゐられた。當日の中村先生の詠草を記しておかう。

内日射す都に來つつ塵あびてわか葉を見れば
今日もかなしも

四五句の表現が、いかにも中村先生らしくて、當時の私にさへ何か心に觸れてくるものを感じられたのであつた。今、ここで思ひ出すのであるが、平福、岡、齋藤諸先生並びに土田耕平氏等と初めての対面は、恐らくこの歌會席上であつたかも知れぬ。土屋文明氏とは、いろは館のアララギ發行所で、島木先生と對談されてゐたのを偶然來合せてお逢ひしたのだが、土屋氏は島木先生のまへで膝を立てて兩手を膝にくみながら坐談してゐられた姿が思ひ出される。

戸塚恒司君と私とが、大いに饒舌をふるつて議論をやるので、齋藤茂吉氏は私達の後に立つて來られて、大いにやりたまへ、ここらは議論が盛んだな、と應援してゐられた。黙

々としてゐられた姿の思ひ出されるのは、岡麓氏と、土田耕平氏とである。以上の如く、中村先生に初めてお目にかかつたその時が、私にとつてはアララギの多くの諸先生とお逢ひするの機縁を作られたのであつて、感慨深いものがある。以後お逢ひしてゐる時日が不明であるが、断片的に記憶を辿つてみよう。

アララギ發行所が、麴町下六番町の佐々木氏方に在つたころ、(大正十二年以後の事である。)島木先生はその時は御存命でなく、藤澤君は點呼に召集されてゐた時であらう。一人發行所に留守番をしてゐた私は、偶中村先生の上京に接して、四谷通りへつれて行かれて、料亭魚金の二階で御馳走になつたことがあつた。その時私はしやくりが出て困つた。突然中村先生は、「君のことを社會主義者だと云つてゐる」と云ふ意味のことを云はれた。私は意外の先生の言葉に、「エエ」と驚愕して先生を見た時に、「どうだしやくりはなほつたらう」と云はれた。私のしやくりはそれで止まつた。この時、四谷へ來る道すがら、アララギは金を貯蓄しておかねばいけぬことを話されたのであつた。私は何か氣がひけて言譯めいたことなどを云つたのを覚えてゐる。

アララギ第二回安居會が比叡山で開かれたその歸り、加納曉氏に伴れられて須磨へゆき土田耕平氏を訪ね、それから西宮の香櫨園に中村先生をお訪ねしたことがあつた。夜、近所の遊園地へ飲みに伴れて行つてやらうと云はれて伴れて行かれたが、道で財布を落されて、夜道を探し歩いたことがあつた。幸ひにも財布は遊園地内の道に落ちてゐたのであつた。すでに夜が更けてゐたので、料亭は店を閉ぢてゐた。翌朝おそくまで先生宅で眠つて了ひ、一度おきて布團をあげて了つてからもまだ眠くて、出勤前に新聞社の原稿を書いてゐられる先生の前で、又私はよく眠つて了つた。比叡山の安居會の修業が厳しかつたので旅疲れが一時に來たのであらう。

九州阿蘇山上で、中村先生、土屋氏その他の諸氏と、安居會を終へてから撮つた寫眞があるが、その時の私は甚だ痩せてゐて、頭は五分刈であつて土屋氏も頭髮を現在のやうに伸してをらなかつた。山上の風がひどいので、中村先生は麥程帽子を手におさへて被られてゐる姿が寫つてゐた。阿蘇山湯の谷の安居會は、病人が續出して重態の森山氏を自動車に乗せて土屋氏は熊本の病院までかけつけ、いささか下痢氣味の私は、やはり仰臥するあ

りさまで、熊本から歸つて來られた土屋氏は仰臥してゐる私の額へ手をあてて氣づかつてゐた事も覺えてゐる。九州の歸りに宮島へよつて、それから土屋氏、結城氏、田中四郎氏私と五人、輛の浦附近の中村先生夫人の御實家に立寄つて、中村夫人の御令兄と共に輛の浦の旗亭へのぼり御馳走に興つたのを覺えてゐる。席上へ藝者を呼んで唄をきかせるがどうかと中村先生が云はれたが、安居會の歸りにそのやうなことはいけぬと思つた私は、それを反對したことも覺えてゐる。

永平寺の安居會の歸りに、諸先生と和倉温泉へ行つたことがあつた。宿で中村先生が洋服の下着を著て、ズボン下をはかれた時、傍で見られてゐられた平福畫伯は、「痩せてゐるなあ、鶴のやうだなあ」と云はれたことも覺えてゐる。私はその時、平福先生の語氣が強過ぎる氣がしてならなかつた。中村先生は苦笑されたやうだ。

中村先生は、常に問題の鍵を握る人であつて中村先生が一度立上れば、何かと問題は解決されるやうな感を與へる人であつた。であるから容易に中村先生の前へ相談を持つてゆく譯にもならず、遠慮するやうになつて了つたのである。島木先生歿後のアララギの中心

生命を鋭く凝視してゐたのは、中村先生であつたらう。當然中村先生へ島木赤彦流の精神が通じゆくものがあるからである。赤彦流の態度が隨所に中村先生の行動の裡に認められるのであつた。先生は、人間が社會に生きてゆく上にはどうしてもかういふことをしておかねばいけぬといふその筋道を呼吸をよくのみこんでゐられた人である。そしてよくそれを實現されてゐる。

(昭和九年九月三十日記)

平福先生追憶記

平福先生を深く敬慕しやまざる感情の私の念頭から去らないのは、故島木赤彦先生の黨陶に據るところが多い。アララギへ入會して平福先生を私は御識りする事が出来たのであるが、初めてお逢ひした時の年月の詳かでないのは遺憾に堪へない。最も印象に残つてゐる一事は平福先生のお聲である。龜戸普門院で開かれた伊藤左千夫先生の忌歌會の席上、偶々「高田君どうだ」と歌の批評を指名された時のお聲である。白面の少年であつた私ごときものの名前が、平福先生の御記憶に在つたと言ふことだけでも過分な事實なのであつた。その頃の平福先生は、アララギ選歌欄を全體に目を通してをられ、よく作品と會員の人名を記憶されてゐたやうである。もう一つ印象に残つてゐるお聲は、平福先生がイタリ1へ行かれ、シベリヤを経て御歸朝された時、東京驛のホームで多勢の出迎への人々に御

挨拶なされてゐた時である。私は多くの人々の中に交りながら、外套を小脇に抱へて、「お歸りあそばせ」と御挨拶申上げた。すると平福先生は、「高田君」と一言云はれた。私が頭を上げた時には、もはや先生は他の人々と挨拶を交してをられた。もう一つの印象は、竹尾忠吉君が臺灣へ轉任される時の事である。赤坂の幸樂と云ふ旗亭で竹尾君の送別會が催された、その席上で諸氏が竹尾君の爲に惜別の辭を述べ、その後で各自餘興をやることになつた。平福先生は猫の啼き眞似をしようと言はれ、猫の啼き眞似をされた。その時、私も猫の啼き眞似をしたのであつた。これが平福先生とお逢ひした最後であつた。この會が終へてから私は諸君と別れて、廣野君と夜の電車通を歩いて行く時、向う側を一人で足早に歸られる平福先生の後姿が鋪道に見えてゐたが、たまたま後を振り返られた御姿は、今も私の目に鮮かに残つてゐる。

大正十二年の震災で焼け出された私は一時朝夕の不自由を感じずにはゐられなかつた。その時、アララギの人々には大變御厄介になり、就中島木先生には一方ならぬ御配慮を蒙つてゐる。その折に、平福先生が、お使ひを寄せられて、久留米緋の單衣をわざわざアラ

ラギ發行所に在つた私に届けて下されたことは、いまでも忘れ難い厚恩の一つである。その單衣はいまでも夏になると不斷着に着用してゐる。當時は、冬になつても外套を著られないでゐるが、ある時、四谷の料亭でアララギ同人の會合があつた。四谷通を外套が無くて私が歩いてゐると、平福先生は往來で御自分の外套を脱いで私に著せてくださった。私は勿體ない氣持で料亭の階段を長い外套を引き摺りながら昇つたことがある。外套で思ひ出すのであるが、東京會館で催された、アララギ二十五周年記念祝賀會の折のことである。一月のこととて、勿論外套を著て會場に來た私は、會の受付所まで行く前に自分の外套を何處に預けるのかに迷つた。かうした會席に不馴な私は、外套の預け場所が何處に在るのか分らなかつたので、傍に在つたボックスの上に外套を脱いで置いた。そしてそのまま私は會場に赴いたのであるが、會が終へるまで私の外套は人目のつくボックスの上に置かれてあつた。來賓の人々がぼつぼつ歸られるのに私は挨拶しながら、私も歸る支度をすべくボックスの上に在つた外套を取上げて著たのであつた。その時、目の前に來られた平福先生は、私の外套の置いて在つたボックスの上に、御自分のオーバを置かれ、たまたま歸る

人々に何かと應酬されてゐた。私は歸らうとしてそのボックスの前にイんでゐた。誰やら後の方で、ボックスの上のオーバに眼を止めたのであらう。これは誰のだと言ふ聲が聞えた。私は、即座に「平福先生のです」と言つた。その時、來合せてゐたボーイがそのオーバを「私がお持ちします」と言つて取り上げた。

平福先生と二人で旅行したと言ふ話である。私が隨行したと云ふべきであり、私の生涯の上に特記しておくべき事實なのである。島木赤彦先生の墓碑に、平福先生が墓銘を書かれ、信濃の高木に建設された時のことである。平福先生は或日、青山のアラギ發行所に御立寄りになつて、今夜、明日の墓碑建設式に信濃へ行くから宜敷く頼むと仰せられてお歸りになつたさうである。その後で、私はアラギ發行所へ立寄つたのであつた。平福先生が先刻御訪れになつたことを、近所に住んでゐられる土屋文明氏が未だ御承知ないと言ふので、私は、發行所に平福先生の見えられた事を土屋氏に御知らせすべく、土屋氏の御宅を訪問しようとしたところ、折から森田草平氏御夫妻を電車通まで見送りに出られた土屋氏と、その道でお逢ひしたのであつた。此夜、平福先生と共に私は新宿驛を發つたので

ある。土屋文明氏、堀内通孝氏、山口茂吉氏、其他の諸氏が見送つて下さつた。久保田夏樹氏は同列車であるが、別に乗車されてゐた。

歸途は別々であつた。平福先生は一足先きに高木の久保田家を辭されたが、途中自動車の故障の爲一列車遅れ、午後六時頃の列車に乗り込まれた。平福先生は赤切符を買はれ、私に示しながら途中下車をして甲州の澤はいい遊びながら歸るのだと、繰返し繰返し私に言はれるのであつた。そして汽車の出發間際に、「高田君、風邪をひくな」と仰せられたのであつた。私は、「はあ」と言つて、先生の汽車をお見送りしたのであつた。上諏訪驛のホームのことである。丸山東一君が一緒に居た。

(昭和九年三月二日記)

加納曉氏を悲む

をみな子の心すなほによりくれどあなあは
れよと言ひがてにけり

右は加納曉の歌である。一つの實際に觸れて歌はずにはゐられぬものを表現してゐるのであらうが、この心持は曉の全生涯を通じて窺はれる半面の風詠であつて、酒に酔ひ女に遊ぶ時にあつても常に環境を知覺し、屈託なきやうで屈託をしてゐる作者の姿がいまもはつきり目に浮ぶのである。けれど、生前の加納曉と僕とは、酒に酔ひ女に遊ぶのは稀であつたから、どの邊まで曉は僕といふものを評價してゐたか判らないといまも思つてゐる。

ただ残念なのは、昨年春、箱根で同人の會合があつたその時、曉は夜の更けるまで僕等と呑んで燥いだ。その時の僕の心持は現在の氣分とは趣を稍異にしてゐるから、昨秋こ

ろからの一變化をなした僕の心持を以つてその當時相對し得なかつたことをつくづくと思ふのである。

いま懷ふに曉は、どこかこせこせしてゐるに大家育ちのところがあり又僕等の一寸した行爲にも干渉せずにはゐられぬ性質もあつた。つまり曉は僕等を弟の如く扱ひ、さう感じてゐたのは實際であつたらう。だから曉のまへで酒を呑む時は、時の過ぐるを忘れ、甘える氣分になることが時にあつた。それ程人懷しく離れ難い何物かを僕等に遺して行つてくれた。

日常の會話の中にあつても、少しも反語的のところがなく、常に眞直ぐにものを言つてゐたことは、曉のやうな境涯にあつて恐らく稀であつたと言つてもよい。交際煩瑣の中にあつて、あれだけの歌の調子を維持し、題材の點から言つても僕等とは違つたものを扱ひ歌ひこなした等は、アララギの歌風を研究する上において重要なものとして考へねばなるまい。又もう一事考へねばならぬことは、曉は、アララギと謂ふ雑誌を隅から隅まで讀破してゐたらしい。これは同人雑誌をやるうへに重要な仕事であつて、いかにアララギその

物の精神に潜入してゐたかが判るのである。人物を崇拜することはよいが、さうした人物を存在せしめてをるアララギそのものに愛情を以つて接してゐた暁の心持は、死してますます僕等の心に沁み亘つてくるのである。假令作歌がアララギ最上の評價を得られぬにしても、かうした人物はアララギの一高峰であつて、島木赤彦先生を失つた如く僕等は追惜してよいのである。なぜなれば、暁には、赤彦先生が踏み入らざる境地に踏み入つた歌を遺してゐるからである。この一事は社會的生活を考へ人間的生活を考へるうへにおいて根本的のものであつて、こんなところをくよくよ區別して考へてゐるうちは人間本來の藝術は生れて來ないのである。

花片に包まれた暁の顔は匂ふが如く僕の目に映じた。死を眼前にしながら技巧を練つてゐた彼は、「作文におのれがはける靴のことを」と未完成の歌を遺して死んで行つた。暁は死なぬつもりでゐたらしい。僕はここを言ひたいのである。

(昭和五年三月十五日)

加納暁と僕

加納暁と僕との初対面は、何年の何日であつたか、現在の僕には全然記憶がない。思ひ出す事も出来ぬ。未知であつた時の加納暁の噂は、多く久保田先生から聽いてゐたのみであつた。酒が好きで愉快な男だよと言はれたことであつた。かつて久保田先生が大阪で、加納暁に案内されて文樂を觀に行つた時、満員でどうにもならなかつた際に、向うの平土間に藝者が固つて座を占めてゐるのを加納暁は見出して、いきなり傍へ行つてなにやら交渉してゐるかと思ふと、固つて居た藝者を別に立たしてその席へ先生を案内したさうである。その間傍觀してゐた先生の目に、暁の交渉がいかにも自然で、先方がいかにも自然に立つて行つた光景を、度々僕に先生は話してああした交渉振りは一寸出来ないと云はれた事があつた。

比叡山で安居會のあつた時、會が終へた後、同人は思ひ思ひの方向に對つて下山した。

加納曉、鈴江幸太郎、僕とは、義仲寺を參拜し、暑い大津の町へ來て鰻飯を食つた。僕は當時須磨に移住してゐた土田耕平氏を訪ふべく曉に伴はれたのであつた。その時内心、大津から京都へでも伴れて行つてくれるといいなと思つてゐた。鈴江君は京都を知らない僕を頻りに一緒に行かないかと誘つてくれた。曉は商用が滯つてゐたらしく僕を伴れて神戸へ歸つた。鈴江君は一人大津から京都行の電車に乗つて別れた。神戸の驛に着いて、僕は汗ばんだ着物を脱いで夏羽織に着更へた。神戸の町を歩いても曉は僕に酒を飲ましてくれなかつた。

曉の家に一泊することになつて、朝、曉のお父さんや、奥さん妹さん達と一緒に食膳に對つた。僕は畏こまつてゐたが、くつろげと言つてくれなかつた。

加納曉の顔を見ると、酒を思ひ出し呑むことが自然の成行になるのであつた。これは多

くの人々の描いた感想であつた。曉自身もそこを自然に感じてゐたらしかつた。だから加納曉を思ひ出すのは、加納曉と歌ではなく、加納曉と酒であつて、どこで呑んだかといふ印象である。がもしかすると曉はまだ酒は呑み足りなかつたのかもしれない。箱根で飯に酒をかけて食べたのも、僕はあれをみて負惜みをやつてゐるなあと思つた。純粹にものを感じた結城哀草果は、それを見て歌にしてゐたが、あれはうまく呑んでゐるのではなくてある寂しさを感じはじめたのであらう。

今年あたり曉の歌集が出て、それを讀んでみれば、誰も手をつけてゐないものを曉は歌つてゐた事に氣が付く者があらう。生前歌集は僕が死んでからでいいと言つた事も思ひ合してみて、そこを考へれば、加納曉と歌といふものがはつきりしてくるであらう。

病中時々歌に關する意見や、發行所にゐる僕に對つての注意や叱責じみた手紙を寄越してゐる。僕はいつも有り難いと思つて、曉の手紙や葉書は保存して持つてゐる。昨年の十

二月には神戸牛肉を送つてみんなで食べてくれると葉書を添へてくれたこと等は、病痾心
勞の中にあつて容易に成し得ない思ひ遣りであつた。

僕は曉の通夜の席に列つた時、牛肉のお禮を奥さんに言はうと思つたが、たうと言へ
ずに歸つて來た。

(昭和五年五月十六日)

晩年の松倉米吉君

米吉君の戀人F子さんの家といふのは、深川にあつて、父親の職業は金屬挽物業であつ
た。繼母と妹が一人ゐた。職人なども少し使つてゐた。今まで轉々として住居定まらずに
をつた米吉君も、今度は落着く心持もあつて、手間取り職人としてその家に住み込むやう
になつた。忠實によく働くのでいつかこの親方は、米吉君を養子に欲しいやうな意向を仄
めかした。

或日、親方の代理である葬式に行つたことがあつた。其日雨が降つてゐて、ある機會か
ら親切にされたF子さんを慕ふやうになつた。F子さんは米吉君の亡くなつた母親に面影
が似てゐた。米吉君もそれを思つてゐた。親方は、娘のF子さんは外に出して嫁がして、
少し眼の悪い妹さんと夫婦にさせたい意向らしかつた。思惑の違つた米吉君はF子さんと

は相通ずるものを持ちながらも、親達との交渉が巧く抄らず、かなりの煩悶の後、彼はその家を飛び出して、こんどは田邊駿一君の世話で下谷黒門町の同業の家に住み込み、F子さんと生活の基礎を定めようと計畫したのであつたが、そこでひどく咯血をして居られなくなり、本所長岡町の東郷理髪店の二階に病臥するやうになつた。

理髪店の家の人といふのが同郷越後の糸魚川であつて、妻君と米吉君の母親とが生前昵懇であつたので、親身になつて面倒をみてくれた。先年二葉町の養父の家を飛び出して一時身を落着けたのはこの理髪店の屋根裏であつた。妻君は子供六人も抱へ、百歳まで生きなくちやと常に云つてゐる大柄な主人と、ぼんやりした小僧が一人ゐた。一番うへの眼の悪い娘が近所の工場へ通つてゐた。(この一家は大正十二年の震災の時全滅して了つた)火ノ見櫓に登るやうに梯子を喘ぎ喘ぎ上り下りして家族と一緒に食事をしてゐた彼は、體温三十九度を越ゆる時さへ、飯を粥にして貰ふことを氣の毒がつて言ひ出し得ずゐた。消化が悪くて仕方が無いから重曹を買つて来てくれると僕は頼まれた事があつた。

福島の鑛山にゐる相坂一郎君から見舞金五圓届いたので質に入つてゐた羽織と着物を出

して、濟生會へ薬を貰ひに行つたが、いつのまにやら羽織と着物はこの家の主人の手で、質に入れられて了ふのであつた。間代や食事代が拂へぬ同居人を置いてある、家族の多い理髪店一家は、主人一人の働きでは容易でなかつた。僕は米吉君の寢床の傍に寝ころびながら、昨夜はひどく血を吐いて外に捨てに行つたなどといふ話をされたこともあつた。

F子さんは時々來るらしかつた。F子さんが來れば自分の傍へ寝かして心を休めてゐるらしかつた。そして家を出てここへやつて來てくれることを米吉君は女に強く求めてゐるらしかつた。F子さんもその氣になつて着物など一枚づつ運んで來るやうになつた。行李の中からF子さんの十七八ごろの寫眞の出て來たのを取出して僕に見せたりした。然しF子さんもさう簡単に家を出て來る譯にはいかなかつた。理髪店の近所に金屬挽物業があつた。以前米吉君はその家で働いた事があつた。深川の家にはばらく居つた職人が、その家へ來てゐるらしかつた。この職人がF子さんに懸想してゐたのを米吉君は知つてゐた。その職人が時々町内でF子さんの姿を見受ることなど噂をしてゐるらしかつた。この男の口からF子さんの父親に知れさうな想像が米吉君の頭にあつた。

秋雨が、毎日じめじめと降つて、肌寒い氣候になるころ、夜具などの乏しいのを彼は嘆いてゐた。寢床の位置を變へたりなどして苦痛を耐へてゐたが、血を吐くのは相變らず夜ごとであつた。僕は幾らかの小遣錢で玉子などを買つて持つて行つたりしてゐたが、あまり力にもならず病勢は衰へなかつた。

彼の室は棟木が見える屋根裏で、壁にはトルストイの肖像畫と、子規の俳句を書いた赤い色紙が懸つてゐた。枕許に竹取物語と歌集赤光があつた。隣家の八百屋の妻君が屋根づたひに果物などを持つて来てくれたり、隣の支那蕎麥屋からはスープなどを貰つてゐた。

米吉君は、やや快い時には、現在の自分の境遇の異常な變り方を客觀できらしかつた。戯曲でも書いてみると面白いと言つてゐた。彼の腹案は、夕方になると、屋根裏の二階に瓦斯燈を點けに小僧が上つてくる、すると暗かつた舞臺が明るくなるといふ仕組で、そこへ僕等が訪ねてきて歌論をたたかひし、現代の歌壇の傾向について彼が所論を述べるといふやうなものらしかつた。戀人が訪ねて來たり、戸塚恒司君なども出てくるらしかつた。人々が皆歸つて了ふと、夜更けに又階下から小僧が上つて來て瓦斯燈を消して舞臺が暗く

なるといふ風のものらしかつた。小僧は毎夜、綿のはみ出した布團にくるまつて彼の傍に寝てゐた。時々見舞物の菓子之餘りなど米吉君から貰つて小僧は食べた。

金は盡きてくるし訪問客はF子さんと僕だけになつて了つた。どこかの施療病院へ入院させねばならなかつた。神田に實兄が居たが、子供の時分母親が弟の米吉君のみ可愛がつたといふので兄弟同志に融和しないものがあつた。それに母親の臨終の時、その兄は七年振り母に逢つて居た位であるから、一度も實兄は病臥中訪ねて來なかつた。僕は遂に警察署へ行き、病人の現状を述べ救濟の方法を乞うた。實兄は警察署へ招喚されたりしたが、米吉君を引取ることを拒んだ。

或日、その理髮店の前に、人力車が停つた。養老院から來た者だが、東郷理髮店の前に松倉米吉といふ行路病者がゐるさうだが、引取りに來たといふ口上であつた。理髮店の妻君は泣いて、「まさか何がなんでも行路病者だなんて言つて、米さんを引取つて貰ひたくありませんよ」と言ひ張つて養老院からの使者を返したさうである。後になつて何も知らず僕が見舞ひに行くと、米吉君は僕の顔をみつめて、「僕は養老院などへは行きたくないか

らね」と言ふのであつた。養老院の性質を知らなかつた僕は、米吉君から色々には言はれて肯くところがあつた。米吉君は屋根裏の棟木を見上げて、ここで首を括つて死にたくなつたと言ふのであつた。

僕は米吉君はもう助かりさうも無いやうな氣がし出して來た。F子さんも減多に來ないやうになつた。どこかへ行つて働いてゐるらしかつた。米吉君はもう血も吐かなくなつたらしい。僕も毎夜は行かなくなり、この異常な不運に苦しむ米吉君の生活を、社會へ知らしたくなつて、「米吉論」を書き始めたのである。その實僕の心には諦めが出てきてゐた。

一方青山に住んでをられた米吉君の先生、古泉千樫氏に依頼して築地の施療病院へ一日も早く入院の手續きを交渉してもらつたのであるが、病室が満員でうまく捗らなく、僕は單獨で病院の理事長に逢つたりなどした。

やうやく入院出来る日が來た。このころは米吉君は、蠟の如く瘦せて床の上に立上がることもすら出來なくなつてゐた。梯子にぶら下がるやうにして階下に降つて來た米吉君は座敷に坐りながら、「もう十年も生きられればいいがなあ」と言つてゐた。傍に聞いてゐた理

髮店の主人は、「そんな氣の弱いこと言つてどうなるものかね、私はこれでももう五十年位生きなければね」と言ひながら米吉君の姿を眺めてゐた。長い間仰臥してゐた米吉君の足の甲や裏は垢で黒くなつてゐた。米吉君はそれを氣にしてゐるやうであつたから、僕は石鹼をつけてごしごし洗つてやつたがすつかり垢は落ちなかつた。理髮店を出て人力車に乗つた米吉君は、幌の中で咳を籠るやうにしてゐた。俥にくつついて歩んでゐた僕は、近所の割下水の邊まで來て、彼の小便を溜めてあつた藥壘を下水目がけて投げ込んだ。

兩國橋を渡りきつて了ふと向うから來る出勤前の山本信一氏の姿が電車通りに見えた。僕はいきなり米吉君が築地の施療病院へ入院することを告げた。山本氏はかつて米吉君の肺結核たることを診断された人である。山本氏は幌の中を覗き込みながら「御大事になさう」と言つた。山本氏も今は世には在られぬが、入院の日途上で逢うたのは因縁が深い。

病院へ著くと、古泉千樫氏が見えてゐた。多勢の外來患者のゐる控室に、腰掛けてゐる米吉君の帽子をかぶつた姿は、大病人と思はれぬ程平氣のやうに見えた。看護婦が出て來て、僕をつかまへて「御病人はあなたですか」などと言つた。この時分、流石に米吉君は

一人で階段は登れない程呼吸が困難になつてゐた。病室は廣かつた。患者が多勢並んで仰臥してゐた。その夜同室に一人死亡者があつた。

本所に在つて、僕は海に近い病院の廣いスチームの通さぬ寒い室に、多勢の病人と仰臥してゐる友の姿を思つてゐた。F子さんがどこへ働きに行つてゐるのか知る由もない僕は通知も出来なかつた。米吉君は女の事を思ふと暗澹として生き甲斐なさを感じてゐるらしい。米吉君の枕許には雑記帳が一冊あつた。それへ鉛筆で、「白き服を着たるとき」といふ一句が書かれてあつた。入院の日の心持を歌はうとしてゐたのである。或日、彼の枕許で、大體書き終へた「米吉論」の草稿を読んで聞かせたら、米吉君は微かに頷いてきいてくれた。

いよいよ臨終の時が來た。その日は古泉千樫氏の持つて來られた長崎のカステラを少し食べて、隣の患者へ、自分の見舞はれたものを分けてやつてくれると僕に言ひ付け、珍らしく床の上に起き直つて食事をした。F子さんもこの日は來てゐた。今日まだ大丈夫かも知れぬと言ふので古泉氏は歸られ、僕と米吉君の實兄は外に晝飯を食ひに出た。しばらく

して戻つてくると、扉を實兄が開くるや否や、米吉君は唸つた。驚いて傍へ寄るともう瞳は上つて白眼になつてゐた。實兄は、「米吉、米吉」と呼びつづけた。僕は彼の肩をゆすりながら「米吉さん、米吉さん」と大聲に呼んだ。米吉君は僕等の戻つて來る前、F子さんの手を握りながら、「田舎がいい。田舎へ歸りたい。お前もすぐ死ぬ」と言つたさうである。女と一緒に死にたかつた米吉君は、死ぬ間際までそれを思つてゐたのが哀れである。

海に近い死亡室へ米吉君の亡骸は運ばれた。その室に錠の下ろされて了つた夕方、島木赤彦氏は忙しく病院に見えたさうである。

(昭和五年四月七日)

通夜

松倉米吉君の遺骸は木挽町歌舞伎座附近の葬儀社から葬儀費用金十五圓といふ約束で、擔ぎ人足三人と友人廣野三郎君、戸塚恒司君及僕で砂村火葬場へ送ることになった。神田で製本業をしてゐる米吉君の實兄松倉さんと、それに米吉君の愛人F子さんも同行である。棺の隙間から折々米吉君の頭髮が見えてゐた。送り華などは勿論ない。

通夜は本所長岡町の東郷理髮店の二階、米吉君の生前の病室、屋根裏で營むことにした。小さな骨甕を前に、戸塚君が線香を立ててぼろぼろ泣いてゐた。戸塚君は死目に逢へなかつたのである。米吉君が生前くち口にしてゐた、悟り顔して怠けてゐる人といふのは戸塚君の事で、どうも戸塚君と米吉君とは死ぬまで意氣投合するところがなかつた。その癖僕も米吉君とは、作歌上の意見は折々合はずに病臥中の彼と議論を戦はしてをつた。病んで生き

ようと思つてゐる人の心持と、そんなことを關心してゐない健康の人の心とは、どうも話が合はぬらしい。

戸塚君が米吉君の死目に逢へなかつたといふのは、病氣中米吉君の言つた言葉を氣に止めてゐたところもあり、その爲に見舞ひに来る日も怠り勝で、特に危篤の日に通知する者もなかつたらしい。危篤の時、病院から諸方へ通知を出さうと思つて、速達便を出したが一錢五厘のハガキに、三錢切手一枚貼れば速達便になると思つてゐたその頃の僕は、ハガキに三錢切手一枚貼つたままポストへ投函して了つた。戸塚君のところへその速達便が遅く着いたのは言ふ迄もない。

古泉千樾氏が、深川のF子さんの家に行つて米吉君とF子さんとの現在までの關係を述べ、今日の通夜にF子さんに來て戴くことは出來まいかと頼まれた様子であつた。F子さんのお父さんもそれを承諾されたらしい。神田の實兄松倉さんも、始めて弟の米吉君が病歿してゐた二階に上つた譯である。近くの町内に住んでゐる以前の米吉君の養父日毛某はやつて來なかつた。やつて來ないのは、僕が米吉君が病院で息を引取るとすぐその夜、日

毛某宅を訪れて米吉君の死を報じた。その時、日毛某は、奥の一間で晩酌をやつてゐたらしかつた。妻君が出て来て、米吉とはもう縁が無いのだからと言ふので、僕はいえ別に御世話して貰はうと思つて来たのではありません。死んだから知らせに來たのです、あなた達の厄介にはなりません、と痰呵を切つた。それに日毛某といふおやぢさんは、なかなかの好色漢で、米吉君のお母さんの通夜に手傳ひに來てゐた若い人妻と戯れてゐたといふことを、米吉君からかつて聞いてゐて知つてをつた僕は、そんな事が腹に有つたからなかなか元氣であつた。通夜に姿を見せないのも無理がない譯である。

F子さんは酒肴の用意などを手傳つてくれてゐた。隣家の八百屋のお神さんも線香をあげに來て泣くのであつた。支那蕎麥屋の若い衆が二人やつて來て、線香を立てながら、「米さんがな、米さんがな」と言つて涙を零して歸つて行つた。廣野君も來たし、田邊君も來た。そのうち階下から床屋の主人が上つて來て、酒でも呑んで唄でもきかせて下さいと言ふので、少し座が賑やかになつてきた。僕が、「雨は降る降る」とか、「赤い唇褪せぬまに」とか歌ひ出すと戸塚君が様々の唄を歌ひ出す。終ひに松倉さんが檜さびをやり出すといふ

光景になつてきた。F子さんは黙つてそれを傍で聞いてゐた。向島の料理屋などに奉公してゐたF子さんはかうした光景にはあまり驚かないところがあつたらしい。

理髮店の前は、吉田通りと言つて、夜はおそくまで人通りが多くて、夜店などが竝んでゐた。町筋の活動寫眞館や、寄席などが終演して人通りが多かつたが間もなくひっそりと夜は更けて行つた。向う側の葬儀社から、よく早桶を叩いてゐるよと言つてゐた米吉君の言葉や、「救世軍の集りの唱歌も」と歌つた米吉君が思はれてきた。米吉君は、もうかうした夜の街中の二階にゐない。夜の街通りと、病歿してゐた米吉君の姿とは、僕の頭に妙に對立して心が陰氣になつてきた。誰やらお經を唱へ出して、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛といふ聲が起ると、僕は大きな聲を上げて泣き出してつた。何か言はうと思つても泣き聲に遮ぎられて言葉が出ない。床屋の主人が僕の傍にきて、僕がよく米さんの面倒を見た事などを吹聴して慰めてくれてゐたが、それでも僕の泣き聲は止まらない。かうした光景の中にしばらく在つた古泉千櫻氏は、遅くなると言ふので歸つて行かれた。F子さんは夜明けまで眠らずにゐたらしい。

米吉君の夜具類は消毒して理髪店へ進呈することにして、藏書は確か戸塚君と僕とが貰つた。古ぼけた雑誌や書籍ばかりで、高價な本らしいものはなかつた。僕の貰つた中で、「柿本人麿及其時代」といふ民友社から發行された四六版の本がよかつたのかも知れぬ。この本は間もなく島木赤彦先生にお貸して了つた。先生は、この本のこととは忘れて亡くなられたかも知れぬ。

F 子さんは形見に何を持って行かれたか知らぬが、F 子さんのかつて米吉君と同棲しようと言つて持ち運んできた柳行李は、しばらく理髪店の家に預けられてあつたらしい。

古泉千樫氏は、幾日か過ぎて本所の僕の家に來られて松倉君が浪吉君に世話になつたことの禮に上がった、と言つて僕の父に挨拶されてゐた。その時の古泉氏の言葉は、吃つてゐて話が世間じみてゐなかつた。座敷へ上らず店先で歸られた。

F 子さんも僕の家に来られた。女に訪問された事のなかつた僕は、何だか恥かしくて物が言へなかつた。

米吉君はたしか未成年である。大正八年十一月二十五日、二十五歳で死んでゐるのである。古泉氏は成年で、僕も、F 子さんも成年であつた。理髪店の主人も成年であつたと思ふ。

(昭和五年七月二十八日)

米吉君歿後の事など

大正八年十一月二十五日午後二時頃、築地病院の寒い室で病歿した友人米吉君の姿や、その聲は永久に僕の心から離れない。本年十三回忌に當るので、益友早川幾忠君が、同君の主宰する雑誌「高嶺」へ何か米吉君に關する感想を書けといふ。僕は、米吉君の事に就いては、相當詳しく歌の上からも論述してゐるのであつて、僕の歌論集「作歌餘録」を讀んでいただければ幸甚である。いまここでは、生前の米吉君の事や、歿後の米吉君に關する追懷などを記して見たいと思ふ。

米吉君が、深川で金屬挽物業の職人をしてゐたころ、その親方の娘さんと相思の仲になつて、無我夢中になつて精神を煩はし、又は過度の勞働に携はつたのは、生理的にひどい損害であつた。娘さんの顔が、亡くなつた米吉君のお母さんの顔に似て見えたので、僕

は、何の氣なしにそれを米吉君に告げたら、米吉君は、「君もさう思つたかね、僕もさう思つたんだ」などと言つて亢奮してゐた。然し、米吉君は若くして死んで行つたが、これは大きい幸ひと言へば言ひ得るのであらう。戀し合つて夫婦になると言ふやうな事は、この世の中に極めて少ないのであるから。

米吉君は、非常に猜疑心が深かつた人である。これは、自身もさう言つてゐたから是非もない。僕が、アララギへ入會して間もない頃、田端の大龍寺に子規忌歌會が營まれ、その時、子規先生の母堂も參列され庭で寫眞を寫したことがあつた。僕は、前列に出て子規先生の母堂と列んで寫した。その寫眞をみて米吉君は、非常に嫌な顔をして、高田は出しやばり過ぎてゐると言つたさうである。僕は、何も出しやばつて前列に加はつたわけではないが、この話など米吉君の氣風の窺へる一つであるまいか。

大正十二年の何月だつたか、僕は戸塚恒司君と共に米吉君の墓所へ行つて、米吉君の骨甕を掘り出したことがあつた。これは、米吉君の遺志に據つたのであつて、少しも他意がないのである。米吉君が生前、亡母のお骨を故里の越後の糸魚川町の菩提所へ納めたいと

言つて死んで行つたからである。米吉君の亡母のお骨の甕へ、米吉君のお骨を少し入れてそれを寺へ預けて、東京にゐる米吉君の實兄が受取りに来るやうにしておき、僕は以前よりそこに葬つてある森田家（事實は森田家の墓地へ、米吉君と母親は同居してゐたわけである）の納骨をやはり掘り出して水道の水でそれを洗ひ、甕へつめてしばらく僕の家へ置いたのである。その森田家のお骨を持つて、僕は八月に糸魚川の米吉君の故里へ赴いた。そして森田家の菩提所へそのお骨を納めようとしたが森田家一家は離散して、主とする人がいまるまいといふので、親族會議がひらかれて、僕はお骨を持つてその席上へ出たことがある。少し理窟を言はれたが、僕はそのお骨を納めて來られた。一方、米吉君の母親のお骨の中へ、米吉君のお骨を少し分骨してあつた甕は、しばらく神田の米吉君の實兄の家に在つたが、實兄が故里へ行かないうちに大震災があつた爲に、實兄も消息を絶ちお骨も不明となつて了つた。

森田家の墓石をとりのぞき、その跡へ松倉米吉の墓を建立したのであるが、森田家のお骨は分骨して、僕が震災に逢はぬまへに越後へ持つて行つたことは、これは、森田家の墓石

はなくなつたが森田家は生國の土に納まつて自然であらうとおもふ。

いま米吉君の墓には、米吉君のお骨と、少しばかりの母親のお骨と、森田家のお骨の残りがあるわけである。因にいふ。森田家といふのは、僕が、米吉の生涯の中に記しておいた、築地の洗濯業、山岸氏といふ伯母さんと稱した人の家である。實際は、伯母ではなくて、米吉君の母親とお友達にすぎなかつたさうである。

松倉米吉の墓の文字は古泉千樞氏が書いてをられ、「歌人松倉米吉之墓」と命名されたのは、島木赤彦氏である。墓石萬端のお世話をされたのは辻村直氏である。松倉米吉歌集を出したい計畫を島木先生にお話をした時、先生は即座に賛成されて、アララギ叢書にしたらよいと言はれた。その時、アララギ叢書にしたものか、「行路」といふ雑誌を出してゐた關係から、行路叢書第一篇とすべきかを協議したことがあつた。結局、アララギ叢書となつたことは大幸であつた。歌集の印刷は早川幾忠君の世話で、麻布飯倉の宮田印刷所に頼み、紙型をも作つた。部数は四百部である。紙型を作つておけと言はれたのは島木赤彦氏であつた。刷り上つた印刷物を、本所から、荷車を引いて小僧と二人で取りに行つた。

製本所は、下谷御徒町であつたが、これは田邊駿一氏のお世話になつた。製本代が一部二十五錢であつた。早川君が背文字を書いたり装幀をした。震災前に紙型を古今書院へ差上げて再版を出してもらふやうにして置いた爲に、今日まで繼續して出版されてゐる。もし、本所の僕の家にもあれば紙型は焼失してゐるわけである。

現在、松倉米吉が生存してゐたならば、米吉の歌風といふものはどんな風に發展してゐるか興味ある問題である。ともかく米吉の歌風といふものは、啄木調からある處は影響は承けてゐるが、やはり萬葉張りの歌である。しかしこの萬葉調といつても、米吉の歌調といふものは、どこかぎごちなさがある爲に、調子が所謂萬葉調のなめらかさがなくて、彼の独自の相で押通して行かうとする氣稟が見えて一寸寄り付けない歌風であらう。病牀生活を取つた古來からの歌の中で、米吉の歌くらの深刻味を持つて、現實相にぶつかつてゐるものは無いと言つても過言ではあるまい。病牀の生活をあのやうに見たといふ事は、啄木の歌と全然趣を異にしてゐるのであつた。あの手法なり自然觀照は、アララギの上に

發達した一現象である。現在、それがいかなる人々に愛誦されてゐるか、そして、どのやうな結果を齎してゐるか。いまいふ、プロレタリア的短歌とか謂ふものは、さう謂ふ名の下に唱へんとする言葉としては面白いが、歌の本質から言へばすでに米吉の短歌といふものが、所謂プロレタリア的である。藝術としての内容を十分に具備されてゐるのであつて、いまのプロレタリア歌人と稱する人々は、よくこの點をわきまへてゐなくてはならぬ。米吉君は、かう言ふことを言つてゐる。

「悲惨なれどもたふるまで、苦とたたかふは吾等の天命、一つたりとも苦に多く接して行く事、天命をはたしたるなり。然して奈何に存するとも、吾等に歌つくるべき大なる使命の有る事忘るべからず。歌作らんと信ずる心、進まんとする心に變ず。歩一歩眞實に歩く事、人道學をはたし、神に近づくの經路なり。」

現在のプロレタリア歌人は、よくこの米吉の感想を吟味しなくてはならぬ。現に、これだけの氣魄を持つて歌に接してゐるものがあるであらうか。僕の、「米吉の生涯」及び「米吉論」の中には、プロレタリア的短歌なるものの方向を、米吉の歌なり議論を對照して強

く示してゐると思ふ。読んでいただければ幸ひである。

(昭和六、九)

赤彦先生の選歌

先生に歌を見て戴いてからもう十年近くになる。この十年間に於いての、先生の選歌の仕方をいま考へてみるのも、故久保田先生を偲ぶ縁よすがの一端にならうと思ふ。私が先生をお訪ねしたのは確か大正五年の二月一日であつたらう。當時の發行所は小石川のいろは館で折柄、臺灣から上京中の加納小郭家氏が先生と座談中であつた。其時の初めてお目にかかつた先生の前で、是も初対面の小郭家氏に「君、そんな生白い顔をしてゐては丈夫丈夫振り振りの歌などは出来んよ」など云はれた事を記憶してゐる。先生は私にも刺身を取寄せて下され酒も一杯か二杯か侷められた。此時の會話は略する。で私は先生の御弟子にして下さいとも、してやらうとも言はれず斯うして御弟子になつて了つた。それ以來面會日には一日も缺席する事なくお伺ひして教を乞うた。その時の私の字體は實に亂雜で(現在も亂雜だが)

先生が私の歌の傍に別に判然と書いて下さつて、「かう讀む歌なのだらう」と謂つて、「君の字亂雜で困る」とも言はれずに選をして下さつた。中村美穂も字が亂雜な一人で、先生がよく「中村といふ男は平假名も満足に書けないやうな字を書いてくるが、なかなかいい歌を作るよ」と言はれた。中村も私も、恐らく假名遣ひなどは目茶苦茶であつた。然し、先生はそれに就いては、何んとも言はれず（言はれた事もあつたのだらうが現私の記憶に無い）「此歌はなかなか新しいよ」と言はれて拾つて下さつた。目の前で亂雜な字體を訂正されたり、假名遣ひを訂して下さつたりしても、私は案外平氣でゐて、自責の念が湧いて來なかつた。譬へて謂ふならば、屑籠の中から使へさうな紙を拾つて、皺を伸して下さつたやうなもので、この御恩は、實に山よりも高く海よりも深いのである。

私は常に面會日には、歌と問題とを持つて行つた。そして先生にぶつかつた。先生も若輩の私によく應戰された。餘り私が定めつけた亂暴を云ふので、自分乍ら是は先生に叱られはしまいかと思ふ事が度々あつたが、別にそんな事もなかつた。その頃の私は實に議論が好きで（現でも好きだが）評論雑誌を毎月二三冊買つたり、哲學だとか、心理學だとか

そんな本を讀む力が無いのだが判らうとして讀んでゐた。先生が何時も「方丈記を讀め」と言はれても、讀む氣にもなれず、そんな古臭いものは、現在の私にとつて不必要だと言つて先生と議論した。發行所が龜原に移つた頃、面會日には必ず行く私は、餘り先生が讚める土田耕平氏の歌に、「土田さんの歌は私は嫌ひです。土田さんを東京につれて來て歌を作らしてみなければ駄目です」などと言ふと、先生は「さうか」と言はれて笑つてゐられた、所詮いまにこの小僧判るだらうと思つてゐられたのであらう。月日はかうして經つて東京に土田耕平氏が來るやうになり、度々發行所で土田氏と逢ふやうになり發行所は代々木に移る事になつた。或月の私の歌を土田氏が批評して、種々と詞を指摘してくれた。つまり一例を擧ぐれば、「はも」は追想の場合多く使はれる感嘆詞であるとか、「かも」は何かそこに疑問が含まれてゐる感嘆詞であるとかいふ事等であつた。かういふやうな事は、文法書を読めば一目瞭然であるのに、其當時は恐らく私は無茶であつた。先生は只私には「方丈記を讀め、方丈記を讀め、兩角七美雄も方丈記を讀んでから歌が進んだよ。君はもつとさういふ本を讀んで、技巧を養はなくては駄目だよ、道具がよく無くてはいいものが

出来ないからな」と言はれた。度々こんな事を先生に言はれ、土田氏にも言はれたが、私に湧然として悟るものがなく、土田氏に「奥の細道」などを讀めと言はれても、「そんなものは現在の若い私にとつて親しめない」と言つて、私は強情を張つてゐた。土田氏が其議論の最後に、「そんな理窟はともかく止めて、僕の言ふ本を讀んでみたまへ」と言ふ意味のハガキが來た。斯うしてゐる中に、土田氏の歌が好きになり、土田氏に尊敬の念が起きた。それと同時に詞などを氣に止めるやうになつた、一方に於いては、私の歌も萎縮し氣味になつて行つたかも知れない。やや私事を長く挿んだ嫌ひがあるが、兎も角も、斯うした渦中にあつた私を大觀して、引き伸して下さつた。先生の極めて自然の導き方を説明するには、斯うした私事も必要なのである。

先生はよく、「歌を選ずるには、作者がどういふ處を捉へてゐるか、それを第一に發見せねばならぬ」と言はれた。先生は、一度未知の人と逢はれても、直ちに其の人の素質如何を看破してゐる。其の人の顔や名は忘れてゐても、素質は忘れてゐない、そこに先生の引力がある。私のやうな亂雑な文字を書く男も先生は好きだし、美事な文字を書き且聰明

なる人をも先生は好まれた。以上はただ單純な例證だが讀者の判斷を俟つ。先生は、自分は多種多様に動いていかなくはならぬと云つて、自己の終始を達觀したやり方ではなくて、たまたま先生の内容の苦しみが、それらの方面に働き懸けてゆくのであらう。だから怒られるときは、瑣細な事にも怒られるし、怒られない場合もある。かういふ先生の方面を餘り小伶俐に見抜き過ぎると、先生に妙な城壁があるやうに見えて寄りつけなくて、遠離つて了ふ人も出来るのであらう。

この一二年間の事だが、私の歌を先生の目の前で見て戴く時、「今月は高田だめぞ」と言はれると、言ひ知れぬ頽廢的の氣持になり、世間が暗くなるやうだつた。この心理過程は傍觀者に判るまい。「今月はいいな」と言はれると世間が明るくなつたやうになり、酒でも一杯やりたくなる。假名遣ひや、天仁波等に一寸違つたところがあると、「まだだめだなあ」と一寸訂正される。この「まだだめだなあ」と言ふ一言が、私の胸にどきんと來る。屑籠の中から拾ひ出されて、皺を伸ばして下さつた時代は何んとも感じなかつたが、このごろになると、實に私の心に響き亘つてくるものがあつた。同時に何か私の一言一句

にも注意してゐられるやうで、以前のやうな甘えた氣持になつて來ない。餘り底の方から
ぎよろぎよろ自分を觀察してゐるやうに見えるから、此方からも先生の際を見て、一本ぶ
ち込まうと思ふけれどなかなか隙がなく此方が恐ろしくなつてくる。御病氣の時でもさう
だ。私はどうしても無條件で先生の前に坐れない。何かそこに雜念が湧く。その雜念をと
り消さうと焦燥するこの心理状態を、先生は看破されてゐられるのかしらと思はれたりし
た。此の心持は、自分にとつて不純粹なのか、又當然あり得べき事なのか未だに判らぬが、
ある考へを述べてみるならば、かういふ心持を抱いた私は、どこか先生の外形に餘りに威
嚴な表れがあつた故かとも思はれた。この威嚴——是が先生にとつて、一方にある疲勞を
早く醸していかれはしまいかとも思はれた。後十年も生きてお在でだつたら、又私も元の
やうに、無條件で先生に甘えてゆかれたらうと思へてならない。

(大正十五年九月十六日)

先生と金のこと

久保田先生が震災前の麴町のアララギ發行所に在られた頃、私達同志で故松倉米吉君の
歌集を出すので困つた事があつた。其時あと百圓といふ製本代が無くて困つたのである。
松倉君の先生故古泉氏が御自分でも困られたと見え、あとの金は岩波さんにでもお借りし
て出し給へ、それを赤彦から頼んでもらつたらいいだらうと言はれた。私は、古泉氏の言
はれた通り先生の前へ行つて申上げたら、先生は苦い顔をされ傍にゐた人をかへりみて、
まさかそんな事が出来るものかね、と言はれた。つまり松倉君の事は岩波さんは關係ない
のと、松倉君には古泉先生等の在られる事などを考へられ、その道理の合はない事を指摘
されたのであらう。まあ君達の力で金を集まるだけ集め給へといふことなのであらう。そ
こで幾日か経つて私は、アララギとは無關係な歌を作る婦人の家へ、ある人の紹介で行つ

て、寄附を頼んだがことわられ、仕方なく古泉氏のお宅へ行きお話したところ、十圓だつたか二十圓だつたかお借し下さつたので、それを持つて自分達で集めた金とを足して、發行所へ再び来て、いまでも目に浮ぶが、財布をさかさにしてこれだけしか集りません何卒よろしく御願ひしますと言つたところ、先生は大變感激されたお顔をして、足りない所をその翌日銀行へ行かれて出して来て下さつた事をいまま先生の高恩の一つとして覚えてゐる。

つまり先生は、作歌の上に又歌を作つてゐる仲間の上に、自然に求められる氣息といふものを愛された。だから先生が選歌なされてゐてもその例を見出すのである。不斷いくら拙い歌を作つてゐる人でも、又ある場合は根本的に困つた人物であると思はれても、その人が歌を作つて来たとき、又その歌を選されつつある場合は、先生は自分の氣息に合ふものをどうかして探し出さう探し出さうとしてゐられる風に見える。であるからよい歌がたまたまあつた場合、自分のことの如くに喜ばれたのであらう。

(昭和五年一月六日)

九月一日

地震があると同時のやうに、私どもの町から三丁許り隔てた町にあたつて煙があがつた。それから間もなく既橋むかうの浅草藏前あたりからも煙があがつた。もう一つは深川方面からひろがつてくる。かうした間にあつて、隣家の人達と一緒に、母や妹弟達は、電車通りを越した河端の家へ行つて避難をしてゐた。父は、家に居て荷作りをし、十八になる弟と私とがその荷を擔いでは河端の家へ持ち運んだり、家具布團などの荷は河端に積んだりしてゐた。見る見る河端は人々の運んでくる荷物で山の如く行列をなした。一時間餘りは往來は荷を運ぶ人達でうづまつた。そのうち三丁許り隔ててゐた町の火が、私どもの町を一週したかと思ふ間に、荒まじい威勢で押し寄せてきた。往來は火に追はれてくる人で充滿した。私は擔いでゐる行李を抛り出して、家へ引き返さうと思つたが、既に煙で先

が見えなかつた。弟や、父が家にゐるのを知りつつ家へ引き返すことが出来なくて、母や妹達の居る河端の家へ駆け付けた時には、母や妹達の姿は見えなかつた。厩橋際の河岸を見渡したが、そこにも居なかつた。火煙が後に追つてくるので、私は河に入った。岸には土を積んだ船や、鐵材を積んだ船等があつた。女子供は泣き叫びながらその船を目がけて乗り込んでくる。河端一面は濛々たる煙であつた。けむさうな目をして河面を見てゐる父の姿が、人々の間に見えたかと思ふと、既に煙の中へ消えて行つた。厩橋の橋桁は盛んに燃えはじめた。渡つてゆけば、きつと途中で焼け落ちさうな光景に思へる。渡り切れば、そこには藏前方面から燃えてきた火の手が盛んに待ちかまへてゐる。私は、鐵材を積んだ船に乗つて、火の粉を避けてゐたが、熱くてやり切れぬので船端へ掴まりながら水中に浸つて、船の上に居る女達に水を掛けてやつてゐたが、益々火の粉が降つてくるので、着物も足袋も脱ぎ捨てて、川の中程まで泳いでゆくと、燒材が流れてきたのでそれに縋り付いた。忽ち他の二三人もそこに縋り付いたが、間もなく傳馬船が近くに居たので、それへ引張り上げて貰つた。

土を積んだ船は、あわてふためいて乗り込んでくる人々のために、岸を離れることが出来ず、ただ船頭は、「そんなに乗つたら沈んで了ふ」と怒鳴つてゐる。水中に居る者は船端につかまり上がらうとし、船の上にある者は多勢の人を乗せまいとする。鐵材を積んだ船は、熱いために人々は鐵材の蔭ばかりへ片寄るので顛覆しようとする。かくするうちに土を積んだ船は沈み、鐵材を積んだ船は顛覆し、あるひは船が燃えてくるのである。河中に溺れようとして苦しみ藻掻く老幼男女が叫ぶ。火焰は、岸の凡ゆる建物を舐め盡して、燃木は虚空に舞ひあがる。舞ひ上つた燃木の破片は、水中に藻く人々の頭上に容赦なく降つてくる。もう本所一面は火の海である。

淺草河岸の建物は勢ひを増して燃えはじめた。火煙の間から見える空は、雷さへ鳴つて、からりと晴れてゐる。家屋の燃えあがる火焰の後に、大きい眞赤な夕日が沈まうとしてゐる。言語を絶した感じである。水面を見れば、もう女の溺死體が浮いてゆく。夜に入つた。火の色は益々鮮かになつた。船の上には、絶えず火の粉が降つてくるので、バケツに水を汲み上げては、水をかけてゐる。兩岸の燃えあがる光景を眼前にしてゐる私達は

焦熱地獄の間にある心持がする。びしよびしよに水に濡れた着物も、兩岸の火焰のほてりで忽ち乾いて了ふ。

夜の更けるにつれて、両親や、妹弟達の身が不安に感じられてくる。父や、十八になる弟は大丈夫の氣がする。母や、妹弟達はどうかしたかしらと思ふ心が頻りである。二十一歳になる病身の妹を庇ふ母は、橋を渡つて逃げたかしら、それとも川の中へ逃れてゐるかしら、さうすれば妹は到底助かりさうもない。「駄目かなあ」といふ心が往來する。それと同じに幼い妹の身が思はれる。十九になる妹はしつかりした氣性でないからこれも、「駄目かなあ」とおもふ。四人の子供を抱へた母の周章狼狽の光景が目に見えぬ。氣の弱い母はおそらく氣も顛倒して、子供の處置に困つたらうといふ心も往來する。私は堪へられなくなつた。しばらくして、「南無觀世音菩薩、南無觀世音菩薩」と口の中で唱へられてきた。火に包まれながら焼けずにある淺草駒形の觀音堂に向つて、私は船の上に坐し、一生懸命に震へつつ念じる。両親や、妹弟達の身が思はれる。胸が焼けるやうになる。何時か口には「南無觀世音菩薩」と連続的に唱へられてくる。風は小止みなく強く吹く、川の面は海嘯

でも來さうな流れ方だ。火煙の間から、月が見えたり、星が見えたりしてゐる。火焰の消えた本所河岸の焼跡に黒々と人が集つてゐて、布を棒の先に結び付けて、振り廻しながら叫んでゐる。時々遠くに、何やら爆發する音がひびく。焼けた厩橋や、吾妻橋はまだ火の粉を水面に散らしてゐる。

千住方面から沿岸を噛みつくやうな火焰は、水面に映つて、凄まじい音を立てて燃えひらがつてくる。この火は厩橋方面から燃えひろがつてくる火焰と、吾妻橋際へ來て合しなれば鎮まらぬのである。高い建物が音を立てて燃えあがると、ひとしきり火の粉が降つてくる。その頃、本所方面は、吾妻橋際のサツポロビル會社の建物が盛んに火焰をあげてゐるのみであつて、あらゆる建物は消滅したらしい。ただ岸に焼け残りの木材に火が付いて、吹きめぐる風に焰をあげてゐるのみである。本所沿岸近く碇を下して船を泊めてあつたのが、烈風のために船は知らぬ間に沖へ沖へと流されてゐた。そして、今燃えつつある淺草沿岸に寄せつけられさうになつてゐるのである。船底にゐる女達はそれと知るや、一齊に騒ぎ出した。「船頭さん、どうかして下さい」といふ聲が船底から聞える。火の粉

が盛んに降つてくるので、「これはいけぬ」かと思はれてきた。船底は何時しか、「南無妙法蓮華經」といふ聲で充滿した。船は斯くする間に、厩橋近くまで押流されてゐた。私達三四人は船の上に出でて、火の粉を浴びながら燃えずにある假橋の棒杭に、どうしても船を繋げねばならぬと用意した。私は綱を持つて舳先に立つた。水は渦まいてゐるのである。船と棒杭との間は可成り離れてゐる。誰やら、「泳げるならとび込め」と言つた。私は矢庭に綱を持つたままとび込んだ。綱を棒杭に絡めようとしたが、手に握つた綱がそれには短か過ぎる。うむと船をひき寄せようとしたが私の力では引ばり切れぬ。私は手から綱を離して了つた。船はうまく片方の杭に寄つたために、綱はそれへ絡み付けられたらしい。私は船へ泳ぎ返へさうとしたが流れが速いために駄目であつた。橋から火の粉が水面に落ちてくるので潜りながら浅草沿岸に遁れた。そこらの沿岸の建物は燃えて終つて跡形も無いが、熱くて岸へはあがれぬので、川に入りながら燃え残つてゐる木などを消していると、五六間先の鐵筋コンクリートの棧橋(?)の下に人影が見える。近寄つて見ると、人足らしい男が二人ゐた。私はほつとして、その棧橋の下にゐることにした。私の乗つて

來た船は、火の粉をあびながらゐるらしい。橋から落ちる火の粉が、この棧橋の下まで風に吹かれて飛んでくる。灰塵が眼の中に入つて痛いので、橋の方へ向つてゐられない。燃え残つてゐる棒杭で腹巻などを乾かして、焼トタン板を敷いて、その上に寝てゐると、時々餘震がやつてゐる。潰れさうにもない棧橋とは思ふが、恐怖を感じながらそこを這ひ出しては餘震の終るのを待つて、這ひもどりなどして夜の明けるのを待つた。そこへ印袴纏を著た商人風の男が岸からやつてきて折り疊んだままの新しい手拭を二本、カバンから出して皆に呉れた。私は有り難く思つて、一本を、腹へ巻きつけた。夜が明けるに従つて、向う岸を歩く人影が、往つたり來たりしながら頻りに人々の名を呼ぶ聲が聞えてくる。一人の男が、鶏の丸焦げになつたのと、まはりの焼けた飯のかたまりとを焼跡から探し出した。私は、手をつつ込んでその飯を食べた。鶏は食べられなかつた。男は鶏も食べてきた。朝が明けるが早いのか、私達は岸へ上つて焼跡を歩き乍ら厩橋際に立つた。灰塵まじりの熱い風が吹いて來るので、暫く地の上に坐つてゐた。上野方面は濛々たる煙で行けさうもない。ともかくも本所へ行きたいと思つて、橋桁の焼け落ちた橋を渡つてゆくと、未

だ所々燃えてゐる處もある。這ふやうにして渡つてゆく途中に、生焼けの若い男の死體が横たはつてゐる。弟の姿によく似てゐると思つて、その先を見ると、少女の黒焦の死體が橋にしつかり掴つたままぶら下がつてゐる。恰度末の妹ぐらひの恰好であると思ひながらやうやう渡りきつて、電車通りを見れば、虚空を掴んだ人々の焼死體、及び牛馬の焼死體である。電線は落ち、電車、自動車、自轉車等の焼けて散亂たる中に、死體の匂ひが鼻を衝く。河岸に黒焦げの船が水に沈んで、破片がその船の形をとどめて浮いてゐる。その間に浮ぶものはあらかた溺死體である。跡形も無くなつた吾が家の前に來て、私はしばらく佇んでゐた。

(大正十二年九月三十日)

災害の後に

私の頭には、はじめから母や妹達の身が氣づかはれて、「若しかすると駄目かな」と思はれて仕方がなかつた。家族と分れ分れになつて、船の上にあるながら、兩岸の燃えあがる火炎を眺めては、迎も陸上にゐる人達は助かるまいと思つてゐた。火炎に追はれて周章狼狽する母や妹達は、助かるとしても、恐らく不思議の救助に依るより他はあるまいと思つた。

「どうか助かつてゐてくれ」と祈るよりも、「駄目である」といふ諦念の方が、當時の私の心には勝を示してゐた。

河岸には多くの溺死體が浮漂し、電車通りには散亂たる焼死體があり、被服廠跡に至つては、見渡す限り累々たる焼死體である。この間を、母や妹達を探すべく歩いてゐる私の

心には、一夕にして廢墟に歸した異變現象の中に、當然横はるべきものである如く思ひつ
つ、それらの死骸を眺めまはした。私は、熱中の母や妹達の亡骸に逢はんとする心にな
り得なかつた。寧ろそれらの他人の死骸を見てあるくものの、母や妹達の死骸を目に入れ
たくないとするやうな心理状態である。この心持の底には、又みんな何處かで生きてゐて
くれればいいとおもふ希ひを持つてゐるのである。私はただ、かうした慘憺たる間を、平
氣で、無關心の如く歩き廻つてゐる間に、諦念の中に一道の光明があり、その前に引き
出されて、試さるる自分の姿が見えるやうな氣もした。強く生きぬばならぬと思ふと、四
邊の光景が美術的に見えてくるのである。私の目には時世の變遷及人生の盛衰といふやう
なもの、歴史的現象を、畫圖をもつて示されたかの如く眺められた。私は、かうした状
態を曾て経験したことがないのに、それがいつかの昔経験したる如く思はれて、目前の光
景に對して、驚異の目をもつて見張れなくなつた。是れ程、私には天譴が偉大なる力を有
つて向つてゐたやうである。

私にとつて、母及妹三人を亡くしたことは、帝都がかくまでも慘憺たる状態に陥つたこ
とを悲しむよりも更に痛き悲しみを覺える。と同時に、帝都が一夕にして灰塵に歸した時
にあつて、母や妹達が落命したことは、いかにも自然であり従順である如く思はれて、母
や妹に對して、曾て覺えたことのない信仰的の懐しさを與へられた。これと共に、今後一
緒に生きてゆく、父や、殘された妹弟達を懷ふ情の、いかにもこまやかになつて來たかを
覺えしむる。私は、まだ知り得なかつた自分の心の或る大切な部分を初めて識り得た心地
がする。私達はいかにしてもこの寂しい運命を忘却して、安らかな餘生を送ることの出來
なくなつたことを思ふ。常々の喜怒哀樂に絡はるものは、今度の大震災に伴ふ母や妹達の
死である。私達は、いづこまでこの運命と戦ふことが出来るか。そしてどの位の範圍にあ
つて、この運命に耐へることが出来るか。試練の時機が來たといふ氣もする。

肉體的に滅亡した母や妹達を、悲しみ追憶する一方には、母や妹達の靈魂の存在を思ふ。
母が、一人で死んで行つたのではなく、三人の子供を亡き世の道づれに行つたことは、

どうも私の心に自然に思へて、道づれを持った母の心根を寂しく想像できない。生き残つた私達が、互に親密に、思ひやり深く暮してゆけば、あの世にゐる母には、少しも心配をかけるのであらう。

私は、多くの家族を失つた事を思ふ前にあつて、かつて誰人も経験した事の無い物に觸れ得た感がする。そして現在、この経験を得たことを感謝せねばならぬ。觀ようとして求め得られぬものを、容易に求め得られ、そして自然に近づくことのでき得るのは、母や妹達のお蔭が多いのである。かういふ考への下から、私は、母や妹達の死を無意味の死であると思へない。寧ろ自然に順應した美しい死であつて、私は名残り惜しい氣持になり得ない。いかにもごもつとも、さまで、すといふ心持で生きてゆかれる。

私達は、天を怨むことは出来ない。ただ私達が悪かつたからと思つてゐるより仕方がない。

(大正十二年十一月二十七日)

卷 末 記

拙著「萬葉集鑑賞」の五ヶ年計畫の事業がずつと延びるやうになつたので、その息継ぎとして今度歌論集「作歌手記」を出すことになつた。この著の賣行の順調ならむことを切に祈るのである。私は今後、大いに勉強をして歌論なり、其他の文章を發表してゆきたいと思ふし、萬葉集に關する文章をもどしどし書いて諸賢の期待にそむかぬやうに勉めたいと思ふ。何卒私のかういふ微衷を汲まれて見捨ることなく御後援を願ふ次第である。學力の乏しい私は、又社會的の仕事にも疎くてなかなか自分を生かし得るよい仕事にも取りつけず、ひたすら短歌の道に餽口せむとしてゐる状態である。今日では、歌によつて活計は成り立たぬのが世の情勢であり、私などが歌で飯を食ふなどと言うても一笑に附せられてゐるのであるから、他によい生業を見つければよいと思ふのであるが、さうも成り難く幾つかの著書を出

して、妻と一緒に働いてゐる譯である。なるべく妻の負擔を減らして、私一個の力で生きてゆかれることを念するのであるが、私の能力はそれ程に大きくないらしい。歌を作る人は、全國に幾十萬を數へる程であるから、考へ方遣り方如何によつては生計が立たぬことはあるまいと思ふのであるが、どうも私の能力は活潑に活動して來ないのである。短歌の道に志す人に對つて、君は歌で飯を食ふつもりになつて勉強しなければいけぬ、などとは何んとしても云ひ得ない世の中になつてゐる。できるならば、一方に生業を持つた上で歌の道に携はる程度が今日の生き方としてよい方法なのである。私も勉めてさういふ方法をとりたいと思ふのであるが、今更さういふ道から出發することの容易でない事を痛感する。短歌の道は、先人も嘗て云つてゐる如く、誠に寂しい涯の知れぬ道である。この道を歩くことは、必しも徒勞でないが、一面人を路頭に迷ふところまで行かしめる道であるのかも知れない。それでも轉びながら、起き上がりながら、歩んで行かねば

ならぬ宿命があるやも知れない。人はどんな事をして生きて行かれると云ふ信念はあるが、いざ現代の生活様式を考へながら生きようとすればさうたやすくはこの信念と合致し難い。今日、私と同年輩の知人が來て、朝五時から夜の七時まで救農工事で働く賃金が四十錢であるといふ話をした。妻があり、幼い子供が三人あつて、一人は病んでゐると云ふ。頑健でないその人は、痩せてゆくより他に仕方のない恰好であつた。これでも人間は生きてゆかなくてはならぬのが常である。どんな職業でも一人一人が生きてゆかれる職業であつたならば、その職業を尊敬しなければならぬのが當然である。兎も角も、やはり歌で飯を食ふことも一笑に附してはいけぬのであるから、世の人は私のかういふ考へ方を笑はないで欲しい。私は歌の爲に路頭に迷ひたくない。歌の爲に生きてゆかれる事を望む。或る外國の小説に、着物がぼろぼろになつて偉がつてゐたいのが東洋流の心理であるといふ、看方をして、一人物を描いてゐるところがあるが、これは人間一

般の持つ心理である。何も東洋人に限つたことではあるまい。古來藝術家にありがちな心理はこれに似てゐるのかも知れぬ。現今ではかういふところは既に突破してゐるのであらうが、結局は自分のものに即かうとする傾向がある。これが藝術家の身上である。以上のやうな私の言ひ方は自分の著用してゐるものを一枚づつ脱いでゆく心理に似てゐるのかも知れぬ。或ひは一種の愚痴となつてゐるのかも知れぬ。

私の歌を愛好される人々が私の心持の経緯を理解して下さい、かういふ態度に共感されむことを祈つてやまぬ。本書の出版は御迷惑を顧みず古今書院主人を煩はした。同書院の柘谷繁明氏の御盡力も忘れてはならぬ。村田利明氏、鹿兒島壽藏氏には多大の助言を蒙つた。厚く御禮申上げる次第である。村田氏には校正を煩はした。

昭和十年三月十五日 田端寓居にて浪吉記す



昭和十年四月二十二日印刷
昭和十年四月二十六日發行

作歌手記
定價壹圓五拾錢

著者 高田浪吉
發行者 橋本福松
印刷者 田中末吉

東京市神田區駿河臺二丁目十番地
東京市牛込區改代町二十四番地

版權所有

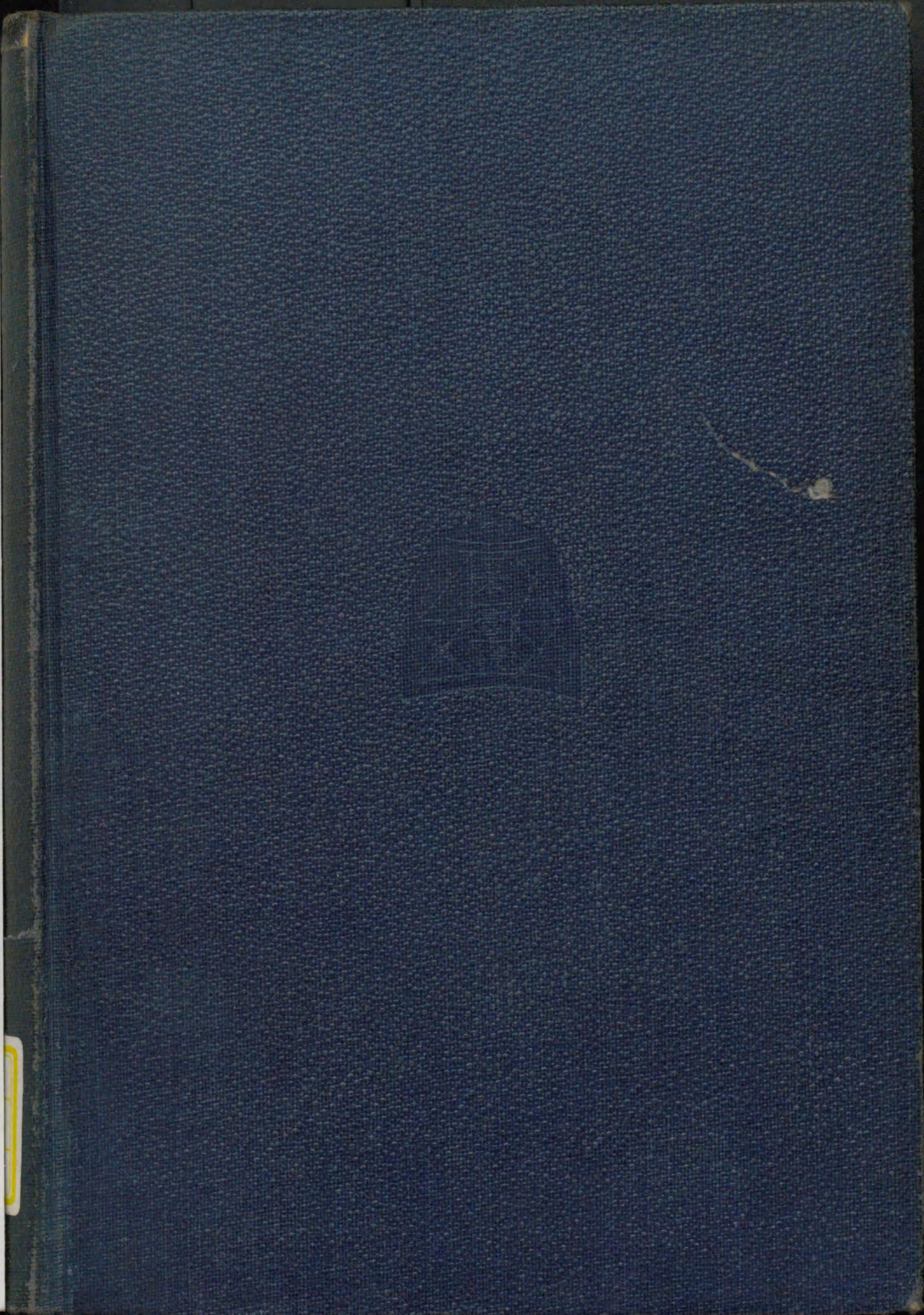
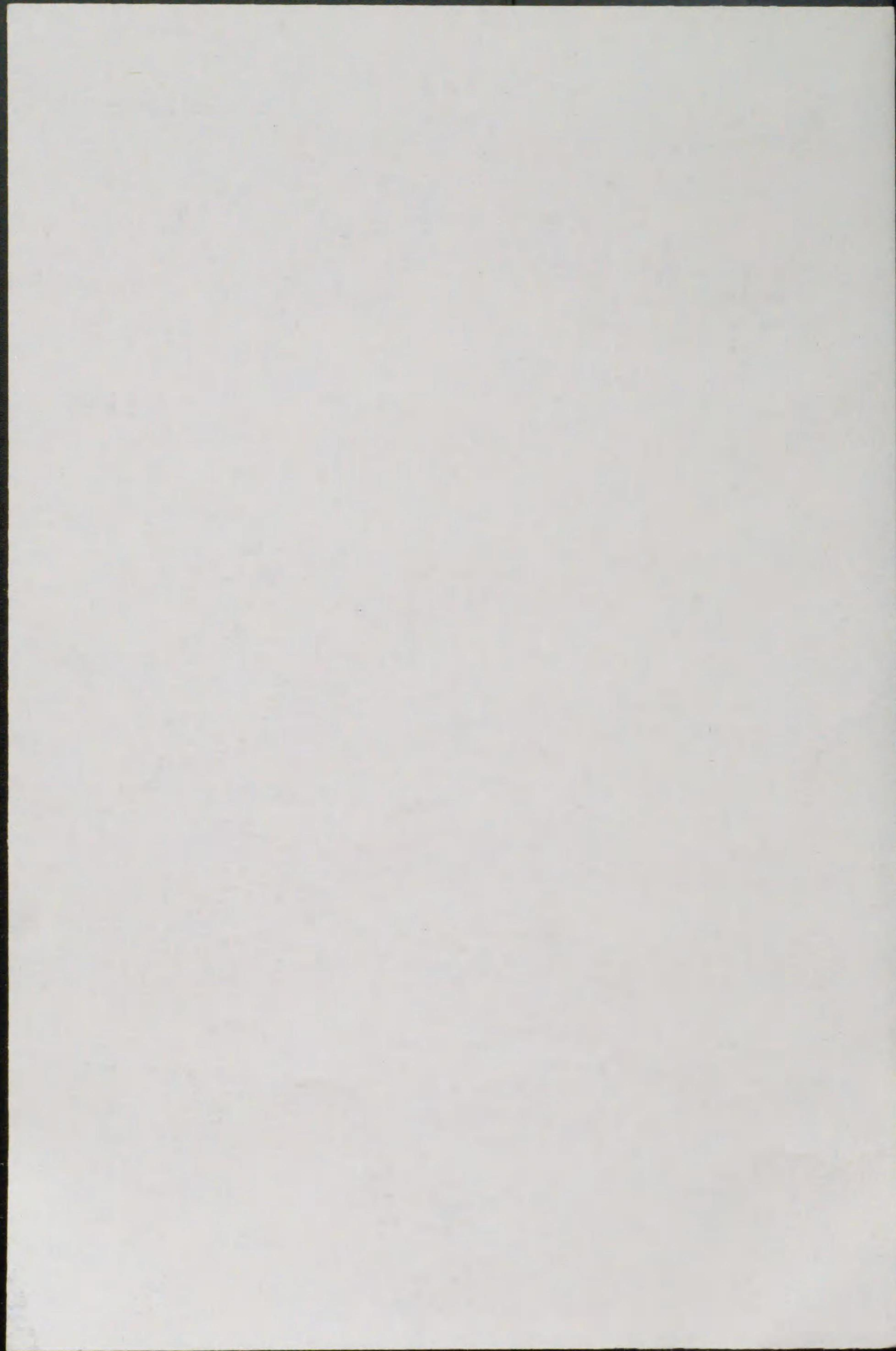
發行所 東京市神田區駿河臺二丁目拾番地
古今書院
振替東京三五三四〇番

行印社想理

高田浪吉著書

歌集川	波	昭和四年三月	定價二圓三十錢 古今書院發行
歌集砂	濱	昭和七年四月	定價一圓五十錢 岩波書店發行
歌論集作歌餘錄		昭和五年八月	定價二圓六十錢 古今書院發行
作歌手記		昭和十年四月	定價一圓五十錢 古今書院發行
現代短歌の鑑賞		昭和七年十二月	定價一圓五十錢 古今書院發行
萬葉集鑑賞 卷第一		昭和八年八月	定價一圓 古今書院發行
萬葉集鑑賞 卷第二		昭和九年三月	定價一圓二十錢 古今書院發行
萬葉集鑑賞 卷第三		昭和九年九月	定價一圓五十錢 古今書院發行

632
171

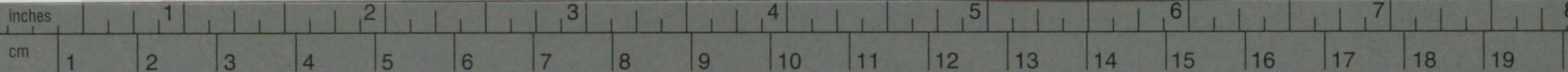


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

